

ابو عبد الله الحميدي في سنة تسع وثمانين للهجرة وقال الى
رسله اليها فلما قدمها والمغرب سنة سبع وسبعين
بأطراف البلاد جماعة خارجين معه جماعة من الجند بلغد
الله فاتاه بمائة الف رأس من ارض
ن الى جهة اخرى

アラビア語のノート

古典アラビア語の授業ノート

Ⅲ

イスラーム以前～初期の話

－詩人たち・預言者サーリフ

<http://arabiago.jimdo.com>

アラビア語のノート 古典アラビア語の授業ノート III

目次

1. ムラッキシュ	3
2. アムル・ブン・クルスーム1	10
3. アムル・ブン・クルスーム2	13
4. サーリフの雌ラクダ	15
5. ムタラツミスとタラファ	21
6. ダーラト・ジュルジュルの日	23
7. イムルウ・ル・カイス1	30
8. イムルウ・ル・カイス2	31
9. イムルウ・ル・カイス3	36
10. イムルウ・ル・カイス4	38
11. イムルウ・ル・カイス5	42
12. カイスとルブナー	45

ずっと前の古典アラビア語講読の授業のノートをもとに作ったアラビア語と日本語の対訳です。アラビア語には母音符号をつけています。

先生の講義内容は正しかったはずですが、受講者の不注意のため、このノートにはいくつか間違いもあるかと思えます。ご容赦下さい。

この冊子は同タイトルのWebページに、順次掲載しているものをまとめたものです。

お気づきの点、ご質問等がございましたら、<http://arabiago.jimdo.com> のページからご連絡をお願いします。

このⅢでは、イスラーム以前から初期にかけての詩人達の話と、ムハンマド以前の預言者サーリフについての物語を載せています。

- ◇ アムル・ブン・クルスーム、タラファ、イムルウ・ル・カイスはジャーヒリーヤ時代(イスラーム以前)の7つ(あるいは10)の長詩を集めた詩集『ムアツラカート』の中に選ばれた詩の作者達です。
- ◇ ムタラツミスはタラファのおじで、やはり、詩人です。
- ◇ ムラッキシュはムファッダル編纂の詩集『ムファッダリーヤート』の中に選ばれた詩人の1人で、彼の甥が同名でやはり詩人なので、彼はムラッキシュ・アクバル(大きいほうの、年長のムラッキシュ)と呼ばれています。
- ◇ カイスとルブナーはアラブで良く知られたカップルの中の一つで、このカイスはマジュヌーン・ライラーとして特に有名なカイスとは別のカイスですが、彼と同様に想い人ルブナーの詩を詠んだことで知られています。
- ◇ 預言者サーリフは、サウジアラビアの世界遺産の遺跡マダーイン・サーレフ(サーリフ)の名前に関わる人物です。

1. ムラッキシュ (ムラッキシュ・アクバル)

قَالَ أَبُو عَكْرَمَةَ قَالَ الْمُفَضَّلُ وَكَانَ مِنْ

アブーイクラマいわく、ムフ
アッダルが言った。

حَدِيثِ مُرْقَشٍ وَسَبَبِ قَوْلِهِ هَذَا الشُّعْرَ

ムラッキシュの話と、彼が
この詩を詠んだ理由は次
の通りである。

أَنَّهُ خَطَبَ إِلَى عَمِّهِ عَوْفِ بْنِ مَالِكِ ابْنَتَهُ

彼はおじのアウフ・ブン・マ
ーリクにその娘アスマー

أَسْمَاءَ بِنْتِ عَوْفٍ وَكَانَ قَدْ رُئِيَ مَعَهَا

・ビント・アウフとの結婚を
申し込んだ。彼は

صَغِيرًا

幼いころ彼女と一緒に育て
られていた。

فَقَالَ لَهُ عَمُّهُ لَنْ أُزَوِّجَكَهَا حَتَّى تَرَأْسَ

するとおじは彼に言った。
お前がかしらとなり、

وَتَأْتِيَ الْمُلُوكَ

王達のもとに出入りするよ
うになるまでは結婚させな
い。

وَكَانَ عَوْفٌ يُقَالُ لَهُ الْبُرْكَ سُمِّيَ بِذَلِكَ

アウフはブラクと呼ばれて
いた。キダの戦いで

يَوْمَ قِضَةِ

そう呼ばれるようになった。

وَكَانَتْ خِطْبَةُ مُرْقَشٍ أَسْمَاءَ بِنْتِ عَوْفٍ

ムラッキシュがアスマー・ビ
ント・アウフに求婚したの
は

قَبْلَ أَنْتَقَالَ رَبِيعَةَ مِنَ الْيَمَنِ

ラビーア部族がイエメンか
ら移住する前であった。

وَكَانَ يَعِدُهُ فِيهَا الْمَوَاعِيدَ

アウフは彼女について
様々な約束を取り決めて
いた。

قَالَ فَخَرَجَ مُرْقَشٌ فَاتَى مَلِكًا مِنْ مُلُوكِ

話し手は言った。そこでム
ラッキシュは出て行き、イ
エメンのある王のもとへ

الْيَمَنِ مُمْتَدِحًا لَهُ فَأَنْزَلَهُ وَأَكْرَمَهُ وَحَبَّاهُ

行き、彼を詩でほめた。王は彼に宿を与え、敬意を表し、ものを与えた。

ثُمَّ إِنَّ عَوْفًا عَمَّ مَرْقَشٍ أَصَابَتْهُ سَنَةٌ

そしてムラッキシュのおじアウフは飢饉にみまわれ、

فَأَجْدَبَ فَخَطَبَ إِلَيْهِ رَجُلٌ مِنْ مُرَادٍ فَرَوَّجَهُ

痛手をこうむった。ムラード部族の男が求婚したので

أَبْنَتَهُ عَلَى مِائَةٍ مِنَ الْإِبِلِ

ラクダ 100 頭をもらい娘を彼と結婚させた。

ثُمَّ تَتَحَّى بِأَسْمَاءَ عَنْ بَنِي سَعْدِ بْنِ مَالِكٍ

男はアスマーを連れてサアド・ブン・マーリク部族の

وَتَرَفَّعَ بِهَا إِلَى بِلَادِهِ

もとから立ち去り、彼女を乗せて(く高くなり)国へ向かった。

ثُمَّ إِنَّ مَرْقَشًا أَقْبَلَ فَأَشْفَقَ عَلَيْهِ إِخْوَتُهُ

そしてムラッキシュが戻ってきた。彼の兄弟や

وَبَنُو عَمِّهِ مِنْ أَنْ يُعْلِمُوهُ بِتَزْوِيجِ ابْنَتِهِ

従兄弟達は従妹の結婚を彼に知らせることを

عَمِّهِ

心配した。

فَلَمَّا سَأَلَ عَنْهَا قَالُوا مَاتَتْ وَذَهَبُوا بِهِ

彼が彼女について尋ねると、彼らは死んだと言い、

إِلَى قَبْرِ قَدْ أَخَذُوا قَبْلَ ذَلِكَ كَبْشًا فَأَكَلُوا

彼を墓に連れて行った。それより前に彼らは牡羊を連れて

لَحْمَهُ وَجَعَلُوا عِظَامَهُ فِي ثَوْبٍ وَقَبَرُوهُ

きて、その肉を食べ、服でその骨をくるんで埋めていたのである。

فَكَانَ مَرْقَشٌ يَعْتَادُ ذَلِكَ الْقَبْرَ

ムラッキシュはその墓を何度も訪れた。

فَبَيْنَمَا هُوَ نَائِمٌ عِنْدَهُ ذَاتَ يَوْمٍ إِذِ اخْتَصَمَ

ある日、彼が墓のところで眠っていると、突然

صَبِيَّانٍ مِنْ بَنِي أَخِيهِ فِي كَعْبٍ مَعَهُمَا

彼の甥の少年2人がサイコロのことで喧嘩をした。

فَقَالَ أَحَدُهُمَا هَذَا كَعْبُ الْكَبْشِ الَّذِي

1人が言った。これは、殺して埋めてムラッキシュには

ذُبِحَ وَدُفِنَ وَقِيلَ لِمُرْقَشٍ إِنَّهُ قَبْرُ أَسْمَاءَ

アスマーの墓だと言ってある牡羊のサイコロだ、

دَفَعَهُ إِلَى أَبِي

父さんがぼくにくれたんだ。

فَقَعَدَ مُرْقَشٌ مَدْعُورًا وَتَأْتِي لِلصَّبِيَّانِ حَتَّى

するとムラッキシュは驚いて起き直り、子供達の

أَعْلَمُوهُ الْخَبَرَ وَكَانَ قَدْ ضَنَى ضَنَى

目の前に現れたので、彼らはとうとうその話を

شَدِيدًا

彼に知らせた。彼は大変やつれていた。

فَجَاءَ فَشَدَّ عَلَى بَعِيرِهِ وَحَمَلَ مَعَهُ مَوْلَاةً

彼は来てラクダに鞍をつけ、女の解放奴隷と、

لَهُ وَزَوْجًا لَهَا مِنْ غُفَيْلَةَ كَانَ عَسِيفًا

その夫でムラッキシュの雇い人だったグファイラ部族

لِمُرْقَشٍ

の者を連れて行った。

وَنَهَضَ فِي طَلَبِ الْمُرَادِيِّ فَمَرِضَ مَرَضًا

彼はそのムラード部族の者を探すために立ち上がったが、

شَدِيدًا حَتَّى أَنْتَهَى إِلَى كَهْفِ حُبَّانَ

重い病気にかかり、ナジュランのふもとの

بِأَسْفَلِ نَجْرَانَ وَهِيَ أَرْضُ مُرَادٍ فَأَلْقَاهُ

フツバーンの洞穴に着いた。そこはムラード部族の

فِي الْكَهْفِ

土地だった。2人は彼を洞穴に投げ込んだ。

(彼の父)サアド・ブン・マールクは息子達の中で

一番のお気に入りのムラツキシユとその兄弟のハルマラを

ヒーラの人に託し、その人は彼らに書き方を教えていた。

ムラツキシユはグファイラ部族の男が妻に、この人

は死にかけている、私は世話をすることはできないと言っているのを聞いた。女はそれを恐れ、叫んだが、男は彼女にしつこく言い続け、

遂に女は男と行動を共にした。

ムラツキシユは2人の油断を狙った。そしてムラツキシユは

グファイラ部族の男の鞍に次のような詩句を書いた。

猛獣達が来て彼の肉と鼻の一部を食べた

グファイラ部族の男とその妻は、帰ってきたとき、彼(ムラツキシユ)について

尋ねられると、彼は死んだと言った。

ある日ハルマラはグファイラ部族の男の鞍を見た。

そしてその詩句を理解した。それで男とその妻に

وَقَدْ كَانَ سَعْدُ بْنُ مَالِكٍ وَضَعَ مُرْقَشًا

وَأَخَاهُ حَزْمَلَةَ أَحَبَّ بَنِيهِ إِلَيْهِ عِنْدَ رَجُلٍ

مِنْ أَهْلِ الْحِيرَةِ فَعَلَّمَهُمَا الْكِتَابَ

فَسَمِعَ مُرْقَشُ الْأُغْلِيَّ يَقُولُ لِأَمْرَأَتِهِ هَذَا

فِي الْمَوْتِ وَلَا يُمَكِّنُنِي الْمَقَامُ عَلَيْهِ

فَجَزَعَتْ مِنْ ذَلِكَ وَصَاحَتْ فَلَمْ يَزَلْ بِهَا

حَتَّى نَهَضَتْ مَعَهُ

وَتَعَمَّدَ مُرْقَشُ غَفْلَتَهُمَا فَكَتَبَ مُرْقَشُ هَذِهِ

الْأَبْيَاتَ عَلَى رَحْلِ الْأُغْلِيِّ

وَجَاءَتْهُ السَّبَاعُ فَأَكَلَتْ لَحْمَهُ وَبَعْضَ أَنْفِهِ

فَلَمَّا قَدِمَ الْأُغْلِيُّ وَأَمْرَأَتُهُ سَأَلُوهُ عَنْهُ فَقَالَ

قَدْ مَاتَ

ثُمَّ إِنَّ حَزْمَلَةَ نَظَرَ ذَاتَ يَوْمٍ إِلَى رَحْلِ

الْأُغْلِيِّ فَفَهِمَ الْأَبْيَاتَ فَشَدَّدَ عَلَيْهِ وَعَلَى

أَمْرَاتِهِ فَأَقْرَأَ أَنَّهُمَا تَرَكَاهُ عَلَى حَالٍ ضَيِّعَةٍ

厳しく迫った。2人は自分達のこうむった飢えと

لِمَا نَالَهُمَا مِنَ الْجُوعِ وَالْجَهْدِ

苦しみのために、彼を途方に暮れた状態で見捨てたことを白状した。

فَوَثَبَ حَزْمَلَةً عَلَى الْغُفْلِيِّ فَقَتَلَهُ

ハルマラはグファイラ部族の男に飛びかかり、殺した。

وَقَدْ كَانَ رَاعٍ يَعْتَادُ ذَلِكَ الْكَهْفَ فَسَأَلَهُ

さてその洞穴に始終出入りしていた羊飼いがいた。

مُرَقِّشٌ مِمَّنْ هُوَ فَقَالَ رَجُلٌ مِنْ مُرَادٍ

ムラッキシュは彼に、どこの部族かと尋ねた。すると彼は言った。ムラード部族の者で、

أَزْعَى عَلَى زَوْجِ أَسْمَاءَ

アスマーの夫のために羊の世話をしています。

قَالَ فَهَلْ تَرَاهَا

ムラッキシュは言った。彼女に会えるか？

فَقَالَ هَيْهَاتَ لَا أَرَاهَا أَنَا وَلَا غَيْرِي

羊飼いは言った。とんでもない、私もその他の者も彼女には会えません。

فَقَالَ أَمَا لَكَ سَبَبٌ تَصِلُ بِهِ

:お前には連絡を取る手段はないのか。

فَقَالَ بَلَى تَأْتِينِي خَادِمُهَا كُلَّ لَيْلَةٍ إِذَا

:いいえ、あります。私が夜帰ると、彼女の召使が毎晩、鉢を持って

رُحْتُ بِقَعْبٍ فَأَحْلُبُ لَهَا فِيهِ عَنَزًا

やって来て、私がそれにヤギの乳を搾るのです。

فَدَفَعَ إِلَيْهِ خَاتَمَهُ وَقَالَ إِذَا حَلَبْتَ فَأَرْمِ

するとムラッキシュは指輪を渡して言った。乳を

بِالْخَاتَمِ فِي الْقَعْبِ فَإِنَّكَ مُصِيبٌ مَّا

絞るときに鉢に指輪を投げ入れてくれ、そうすれば

أَصَابَ رَاعٍ مِنْ خَيْرِ

羊飼いの得られる相応の報酬を得るだろう。

فَفَعَلَ ذَلِكَ الرَّاعِي

それで羊飼いはそのようにした。

فَلَمَّا أَخَذَتْ الْقَعْبَ لِتَشْرِبَهُ ضَرَبَ الْخَاتَمُ

彼女が飲もうとして鉢を取ると、前歯に指輪が

ثَنَائِيهَا فَدَعَتْ بِنَارٍ لِتَنْظُرَ إِلَيْهِ فَعَرَفْتَهُ

当たった。それを見るために火を持ってこさせ、

فَدَعَتْ الْخَادِمَ فَسَأَلَتْهَا فَقَالَتْ لَا عِلْمَ لِي

それが何かわかると、召使を呼んで尋ねた。召使は

بِهِ

私は知りませんと言った。

فَأَرْسَلْتُ إِلَى زَوْجِهَا وَهُوَ فِي شَرْبٍ

そこで彼女はナジュラーンで飲み仲間といた夫

بِنَجْرَانَ

に使いをやった。

فَجَاءَ مَذْعُورًا فَقَالَتْ ادْعُ رَاعِيكَ فَاسْأَلْهُ

彼は驚いてやって来た。彼女は言った。あなたの

عَنْ هَذَا الْخَاتَمِ وَعَنْ قِصَّتِهِ فَسَأَلْهُ

羊飼いを呼んでこの指輪のこととその話を尋ねて下さい。そこで彼は尋ねた。

فَقَالَ دَفَعَهُ إِلَيَّ فَتَى فِي كَهْفِ حُبَّانٍ وَهُوَ

羊飼いは言った。フツバーンの洞穴にいる若者が

دَنِيفٌ فِي آخِرِ رَمَقٍ

私に渡したのです。彼は危篤で衰弱しています。

فَقَالَتْ هَذَا مُرْقِشٌ الْعَجَلِ الْعَجَلِ

彼女は言った。これはムラツキシユです。急いで、急いで！

فَرَكِبَ فَرَسَهُ وَحَمَلَهَا عَلَى بَعِيرٍ فَأَنْتَهَى

彼は馬に乗り、彼女をラクダに乗せて一昼夜の後

إِلَيْهِ بَعْدَ يَوْمٍ وَلَيْلَةٍ فَأَحْتَمَلَهُ إِلَى مَنْزِلِهَا

そこに着いた。そして彼を彼女の家に運んだ。

ثُمَّ إِنَّ حَرْمَلَةَ لَمَّا قَتَلَ الْغُفْلِيَّ رَكِبَ فِي
طَلَبِ مُرْقَشٍ حَتَّى أَتَى مَوْضِعَ أَسْمَاءَ
فَخُبِّرَ أَنَّهُ مَاتَ عِنْدَهَا فَأَنْصَرَفَ وَلَمْ يَرَهَا
(الْمُفَضَّلِيَّاتُ مَعَ شَرْحِ الْأَنْبَارِيِّ)

そしてハルマラはグファイラ部族の男を殺すと、馬に乗り、ムラッキシュを探しに来たが、ついにアスマーのところに来た。そして彼が彼女のもとで死んだと知らされると、彼女に会わずに去った。
(出典:アンバーリーによる注釈付『ムファッダリーヤート』)

○この話の時に作られた、『ムファッダリーヤート』(詩集)にある彼の詩の一部

يَا صَاحِبِي تَلَوَّمَا لَا تَعْجَلَا

2人の友よ、ゆっくりせよ、急ぐな

إِنَّ الرَّحِيلَ رَهِينٌ أَنْ لَا تَعْذُلَا

旅立ち是非難を免れる保証である

فَلَعَلَّ بُطَاكُمَا يُفَرِّطُ سَيِّئًا

おそらく、ゆっくりすることは、不幸を先に行かせ

أَوْ يَسْبِقُ الْإِسْرَاعُ سَيِّئًا مُقْبَلًا

急ぐことは、近づく幸運に先行するかもしれぬ

يَا رَاكِبًا إِمَّا عَرَضَتْ فَبَلِّغْ

馬に乗る人よ、現れるならば伝えてくれ

أَنْسَ بَنُ سَعْدٍ إِنْ لَقِيتَ وَحَرْمَلًا

(私の兄弟の)アナス・ブン・サアドとハルマラに、もし会ったなら

لِلَّهِ دَرْكُمَا وَدَرُّ أَبِيكُمَا¹

あなたがた2人と、あなたがたの父は立派だと

إِنْ أَفَلَّتِ الْغُفْلِيُّ حَتَّى يُقْتَلَا²

グファイラ部族の男が殺されぬよう逃げ通せたら

1 ~ اللهُ دَرُّ ~ はなんと立派なことよ、の意味。非難の場合もある

2 حتى يقتلا² には لا の意味が含まれている

إِنَّ عَمْرَو بْنَ هِنْدٍ قَالَ ذَاتَ يَوْمٍ لِنُدَمَائِهِ

アムル・ブン・ヒンドがある日飲み仲間に行った。

هَلْ تَعْلَمُونَ أَحَدًا مِنَ الْعَرَبِ تَأْنَفُ أُمَّهُ

その母が私の母への奉仕を軽蔑するような

مِنْ خِدْمَةِ أُمِّي

アラブ人を誰か知っているか。

فَقَالُوا نَعَمْ أُمَّ عَمْرَوِ بْنِ كَلْثُومٍ

彼らは言った。アムル・ブン・クルスームの母だ。

قَالَ وَلِمَ

彼は言った。それはなぜか。

قَالُوا لِأَنَّ أَبَاهَا مُهْلَهُ بْنُ رَبِيعَةَ وَعَمَّهَا

彼らは言った。なぜなら彼女の父はムハルヒル・ブン・ラビーアであり、

كَلْبِيبُ وَائِلِ أَعَزُّ الْعَرَبِ وَبَعْلُهَا كَلْثُومُ بْنُ

おじはクライブ・ワーイルでアラブで最も権力があり、

مَالِكِ أْفْرَسُ الْعَرَبِ وَأَبْنُهَا عَمْرُو وَهُوَ

夫はクルスーム・ブン・マールクで最も優れた騎士であり、

سَيِّدُ قَوْمِهِ

息子はアムルで部族の長だから。

فَأَرْسَلَ عَمْرُو بْنُ هِنْدٍ إِلَى عَمْرَوِ بْنِ

そこでアムル・ブン・ヒンドはアムル・ブン・クルスームに使いを送り、

كَلْثُومٍ يَسْتَزِيرُهُ وَيَسْأَلُهُ أَنْ يُزِيرَ أُمَّهُ أُمَّهُ

自分を訪問するよう求め、彼の母親に自分の母親を訪問させるよう求めた。

فَأَقْبَلَ عَمْرُو مِنْ الْجَزِيرَةِ إِلَى الْحِيرَةِ

アムルはジャジーラからヒーラまで、タグリブ部族を

فِي جَمَاعَةِ بَنِي تَغْلِبَ وَأَقْبَلَتْ لَيْلَى بِنْتُ

率いてやって来た。(母の)ライラ・ビント・ムハルヒルは

مُهْلِهِ فِي ظُعْنٍ مِنْ بَنِي تَغْلِبَ

タグリブ部族の女達のかごを連れてやって来た。

وَأَمَرَ عَمْرُو بْنُ هِنْدٍ بِرُؤَاقِهِ فَضْرِبَ فِيهَا

アムル・ブン・ヒンドはテントを立てるよう命じ、

بَيْنَ الْحَيْرَةِ وَالْفُرَاتِ

ヒーラとユーフラテス川の間に立てられた。

وَأَرْسَلَ إِلَى وُجُوهِ أَهْلِ مَمْلَكَتِهِ فَحَضَرُوا

彼は国の顔役達に使いを送り、彼らは出席した。

(وَأَتَاهُ عَمْرُو بْنُ كَلْثُومٍ) 1 فِي وُجُوهِ بَنِي

アムル・ブン・クルスームはタグリブ部族の顔役達を連れて

تَغْلِبَ

やって来た。

فَدَخَلَ عَمْرُو بْنُ كَلْثُومٍ عَلَى عَمْرُو بْنِ

アムル・ブン・クルスームはテントにいるアムル・

هِنْدٍ فِي رُؤَاقِهِ وَدَخَلَتْ لَيْلَى وَهِنْدٌ فِي

ブン・ヒンドを訪れ、ライラとヒンドはそのテントの

قُبَّةٍ مِنْ جَانِبِ الرُّوَاقِ

近くにある丸テントに入った。

وَكَانَتْ هِنْدٌ عَمَّةَ أَمْرِي الْقَيْسِ بْنِ حُجْرٍ

ヒンドは詩人イムルウ・ル・カイス・ブン・フジュルの

الشَّاعِرِ وَكَانَتْ أُمُّ لَيْلَى بِنْتُ مُهْلِهِ بِنْتُ

おばであった。ライラ・ビント・ムハルヒルの母は、

أَخِي فَاطِمَةَ بِنْتُ رَيْبَعَةَ الَّتِي هِيَ أُمُّ

イムルウ・ル・カイスの母であるファーティマ・ビント・ラビーアのめいであった。

أَمْرِي الْقَيْسِ وَبَيْنَهُمَا هَذَا النَّسَبُ

彼女ら2人の間にはこのような関係があった。

وَقَدْ كَانَ عَمْرُو بْنُ هِنْدٍ أَمْرَ أُمَّهُ أَنْ

アムル・ブン・ヒンドはデザートを出させるとき、

تُحَى الْخَدَمَ إِذَا دَعَا بِالطَّرْفِ وَتَسْتَخْدِمَ

召使を去らせてライラを使うように母に命じて

لَيْلَى

おいた。

فَدَعَا عَمْرُوَ بِمَائِدَةٍ ثُمَّ دَعَا بِالطَّرْفِ

アムルは食卓の用意をさせデザートを出すように言った。

فَقَالَتْ هِنْدٌ نَاوِلِينِي يَا لَيْلَى ذَلِكَ الطَّبَقَ

ヒンドは、ライラよ、あの皿を私に取ってくれと言った。

فَقَالَتْ لَيْلَى لَتَقُمْ صَاحِبَةُ الْحَاجَةِ إِلَى

ライラは言った。用事がある人が自分の用事に

حَاجَتِهَا

立つべきです。

فَأَعَادَتْ عَلَيْهَا وَالْحَتِّ

しかし、ヒンドは彼女に繰り返し、しつこく迫った。

فَصَاحَتْ لَيْلَى وَآذِلَّاهُ يَا لَتَغْلِبَ

ライラは叫んだ。何たる屈辱か、タグリブ部族の人々よ、助けておくれ。

فَسَمِعَهَا عَمْرُو بْنُ كَلْثُومٍ فَتَارَ الدَّمُ فِي

アムル・ブン・クルスームは彼女の声を聞き、顔の

وَجْهِهِ وَنَظَرَ إِلَيْهِ عَمْرُو بْنُ هِنْدٍ فَعَرَفَ

血が騒いだ。アムル・ブン・ヒンドは彼を見て、その顔に

الْشَّرَّ فِي وَجْهِهِ فَوَثَبَ عَمْرُو بْنُ كَلْثُومٍ

不吉なものを見た。アムル・ブン・クルスームはテントに

إِلَى سَيْفٍ لِعَمْرُو بْنِ هِنْدٍ مُعَلَّقٍ بِالرُّوَّاقِ

かかっていたアムル・ブン・ヒンドの刀に飛びかかった。

لَيْسَ هُنَاكَ سَيْفٌ غَيْرُهُ فَضْرَبَ بِهِ رَأْسَ

そこにはその他に刀はなかった。彼はそれで

عَمْرُو بْنِ هِنْدٍ وَنَادَى فِي بَنِي تَغْلِبَ

アムル・ブン・ヒンドの首を打ち、タグリブ部族に叫んだ。

فَأَنْتَهُبُوا مَا فِي الرُّوَقِ وَسَاقُوا نَجَائِبَهُ

すると彼らはテントにあったものを略奪し、優良な家畜を

وَسَارُوا نَحْوَ الْجَزِيرَةِ

追い立て、ジャジーラの方へ向かった。

(كِتَابُ الْأَغَانِي لِلإِصْبَهَانِيَّ)

(出典:イスバハーニー著『詩歌の書』)

1 カッコ内は他の書(الشعر والشعراء 『詩と詩人たち』)からの引用で補った

3. アムル・ブン・クルスーム2

لَمَّا حَضَرَتْ عَمْرُو بْنَ كَلْثُومِ الْوَفَاةُ وَقَدْ

アムル・ブン・クルスームの臨終のときのこと、

أَتَتْ عَلَيْهِ خَمْسُونَ وَمِائَةً سَنَةً جَمَعَ بَنِيهِ

それは彼が150歳のときだったが、息子達を集めて

فَقَالَ يَا بَنِيَّ قَدْ بَلَغْتُ مِنَ الْعُمْرِ مَا لَمْ

言った。我が息子達よ、私は父祖達の誰も

يَبْلُغُهُ أَحَدٌ مِنْ آبَائِي وَلَا بُدَّ أَنْ يَنْزِلَ بِي

達しえなかった寿命に達したが、彼らにやって来た

مَا نَزَلَ بِهِمْ مِنَ الْمَوْتِ

死が私にもやって来ることは避けられない。

وَإِنِّي وَاللَّهِ مَا عَيَّرْتُ أَحَدًا بِشَيْءٍ إِلَّا

神かけて、私が何かのことで誰かを罵ったのは

عَيَّرْتُ بِمِثْلِهِ إِنْ كَانَ حَقًّا فَحَقًّا وَإِنْ كَانَ

罵られて同じように返したとき以外にはない。

بَاطِلًا فَبَاطِلًا

正しいことなら正しく、偽りなら偽りで(返した)。

وَمَنْ سَبَّ سُبًّا فَكُفُّوا عَنِ الشَّتْمِ فَإِنَّهُ أَسْلَمُ

中傷する者は中傷される。だから悪口はやめよ、そのほうがお前達にとって

لَكُمْ وَأَحْسِنُوا جِوَارِكُمْ يَحْسُنُ تَنَاوُكُمْ

安全だ。隣人に親切にせよ、お前達は良い賞賛を受けるだろう。

وَأَمْنَعُوا مِنْ ضَيْمِ الْغَرِيبِ فَرُبَّ رَجُلٍ خَيْرٌ

見知らぬ人への無法をやめよ。しばしば個人は

مِنْ أَلْفٍ وَرَدَّ¹ خَيْرٌ مِنْ خُلْفٍ

千人より優れ、(しばしば)拒絶は違約より良い。

وَإِذَا حَدَّثْتُمْ فَعُوا² وَإِذَا حَدَّثْتُمْ فَأَوْجِزُوا

話しかけられたときは注意を払い、話しかけるときは簡潔にせよ。

فَإِنَّ مَعَ الْإِكْتَارِ تَكُونُ الْأَهْذَارُ

何故なら口数が多いと馬鹿話になるから。

وَأَشْجَعُ الْقَوْمِ الْعَطُوفُ بَعْدَ الْكُرِّ كَمَا أَنَّ

最も勇敢な人は襲撃の後、情けをかける。また

أَكْرَمَ الْمَنَائِيَا الْقَتْلُ

最も名誉ある運命は(戦いで)殺されることだ。

وَلَا خَيْرَ فِيمَنْ لَا رَوِيَّةَ لَهُ عِنْدَ الْغَضَبِ

怒りに際して何の反省もない者、咎められても

وَلَا مَنْ إِذَا عُوْتِبَ لَمْ يُعْتَبِ

改めない者に優れたところはない。

مِنَ النَّاسِ مَنْ لَا يُرْجَى خَيْرُهُ وَلَا يُخَافُ

人々の中には、何も良いことを期待されず、悪いことを

شَرُّهُ فَبِكُوهُ خَيْرٌ مِنْ دَرِّهِ وَعُقُوقُهُ خَيْرٌ مِنْ

怖れられない者がいる。その人の物惜しみは、その気前よさより良く、

بِرِّهِ

その反抗はその忠義より良い。

وَلَا تَتَزَوَّجُوا فِي حَيْكُمُ فَإِنَّهُ يُؤَدِّي إِلَى

自分達の部族内で結婚するな、それは

قَبِيحُ الْبُغْضِ

醜い憎悪に導くから。

(كِتَابُ الْأَغَانِي لِلْإِسْبَهَانِيِّ)

(出典:イスバハーニー著『詩歌の書』)

1 و(رُبَّ) رُدُّ 1 と解釈する

2 ف + و عى の命令形(複数)

4. サーリフの雌ラクダ

وَبَعَثَ اللَّهُ صَالِحًا نَبِيًّا وَهُوَ غُلَامٌ حَدَثٌ
إِلَى ثَمُودَ عَلَى حِينِ فِتْرَةٍ

كَانَتْ بَيْنَهُ وَبَيْنَ هُودٍ نَحْوُ مِنْ مِائَةِ سَنَةٍ
فَدَعَاهُمْ إِلَى اللَّهِ

وَمَلِكُهُمْ فِيهِمْ يَوْمَئِذٍ هُوَ جُنْدَعُ بْنُ عَمْرٍو
عَلَى مَا ذَكَرْنَا

فَلَمْ يُجِبْ صَالِحًا مِنْ قَوْمِهِ نَفْرًا

وَكَبِرَ صَالِحٌ وَلَمْ يَزِدْ قَوْمَهُ مِنَ الْإِيمَانِ
إِلَّا بُعْدًا

فَلَمَّا تَوَاتَرَ عَلَيْهِمْ إِنْذَارُهُ وَإِعْذَارُهُ وَوَعْدُهُ

神はサーリフを彼がまだ若い少年のとき、預言者としてサムード(族)に遣わした。それは預言者の絶え間の時であった。彼と(預言者)フードの間にはおよそ100年の差がある。

そして彼は彼らを神の方へ呼んだ。

当時、彼らには王がいて、それは前述のように、

ジュンダウ・ブン・アムルであった。

人々の誰もサーリフに応じなかった。

サーリフは成長したが、人々は信仰からますます

遠ざかるばかりであった。

彼らの上に、彼の警告や弁明、約束や威嚇が相次いで来たとき、

وَوَعِيدُهُ سَامُوهُ الْمُعْجِزَاتِ وَإِظْهَارَ

彼らは彼に奇蹟やしるしを現すことを強いた。

الْعَلَامَاتِ لِيَمْنَعُوهُ مِنْ دُعَائِهِمْ وَيُعْجِزُوهُ

彼らへの呼びかけを妨げ、彼らへの語りかけを無力にしようと

عَنْ خِطَابِهِمْ

したのである。

فَحَضَرَ عِيدًا لَهُمْ وَقَدْ أَظْهَرُوا أَوْثَانَهُمْ

そして祭の日に彼が彼らの前に現れた。彼らは偶像を開帳していた。

وَكَانَ الْقَوْمُ أَصْحَابَ إِبِلٍ فَسَامُوهُ الدَّلَالََةَ

その人々はラクダを所有していた。それで自分達の

مِنْ حَيْثُ أَمْوَالَهُمْ وَطَالِبُوهُ بِمَا هُوَ

財産にちなんだ証拠を強いて、自分達の財産と

مُجَانِسٌ لِأَمْلَاكِهِمْ

同様なものを要求した。

وَذَلِكَ مِنْ بَعْدِ اتِّفَاقٍ مِنْ رَأْيِهِمْ

それは彼らが意見の一致を見た後のことだった。

فَقَالَ لَهُ زَعِيمٌ مِنْ زُعَمَائِهِمْ

彼らの指導者のうちの、ある者が彼に言った。

يَا صَالِحُ إِنَّ كُنْتَ صَادِقًا فِي قَوْلِكَ

サーリフよ、あなたの言葉と、あなたが主についての

وَأَنَّكَ مُعَبَّرٌ عَنْ رَبِّكَ فَأُظْهِرْ لَنَا مِنْ هَذِهِ

解説者だということにおいて、真実を語っているなら

الصَّخْرَةَ نَاقَةً

この岩の中から雌ラクダを出してみよ。

وَلْتَكُنْ سَوْدَاءَ عُشْرَاءَ نَتُوجًا حَالِكَةً

しかもそれは黒くて、妊娠10か月で、今にも子が生まれそうで、真っ黒で、

صُهَابِيَّةً ذَاتَ عُرْفٍ وَنَاصِيَةٍ وَشَعْرٍ وَوَبْرِ

栗毛で、たてがみと、額の髪と、毛と、産毛を持っていなければならない。

فَأَسْتَوَّاتِ بِرَبِّهِ فَتَحَرَّكَتِ الصَّخْرَةُ

そこで彼が主に助けを求めると、その岩が動き、ゆらめいて、

وَتَمَلَّمَتْ وَبَدَا مِنْهَا أُنِينٌ وَحَنِينٌ

中からうめき声とため息が聞こえた。

ثُمَّ أَنْصَدَعَتْ مِنْ بَعْدِ تَمَخُّصٍ شَدِيدٍ

そして女性の出産のときの陣痛のような激しい陣痛の後

كَتَمَخُّصِ الْمَرْأَةِ حِينَ الْوِلَادَةِ

岩が裂けた。

وَوَظَهَرَ مِنْهَا نَاقَةٌ عَلَى مَا وَصَفُوا

そこから彼らが述べたとおりの雌ラクダが現れた。

ثُمَّ تَلَاهَا مِنَ الصَّخْرَةِ سَقْبٌ لَهَا نَحْوُهَا

そして、それと形状がほとんど同じ子ラクダが岩の中

فِي الْوَصْفِ

から後に続いた。

فَأَمَعْنَا فِي رَعِي الْكَلَاءِ وَطَلَبِ الْمَاءِ

2頭は熱心に草を食べ、水と牧場を

وَالْمَرْعَى

求めた。

فَأَمَّنَ خَلْقٌ مِمَّنْ حَضَرَهُ وَرَعِيْمُهُمُ الَّذِي

それでそこにいた人々と、彼に要求した指導者

سَأَلَهُ وَهُوَ جُنْدَعُ بْنُ عَمْرِو

すなわちジュンダウ・ブン・アムルは彼を信じた。

وَأَقَامَتِ النَّاقَةُ يَحْلُبُونَ مِنْ لَبَنِهَا مَا يَعْمُ

雌ラクダはそのままとどまり、彼らはラクダからサムードの人々

شُرْبُهُ ثَمُودًا¹ كُلَّهَا وَضَايِقَتُهُمْ فِي الْكَلَاءِ

すべてが飲むに足るだけのミルクを絞ったが、

وَالْمَاءِ

雌ラクダは草と水のことで彼らを窮屈にした。

وَكَانَ فِيهِمْ أَمْرَاتَانِ ذَاتَا حُسْنٍ وَجَمَالٍ
وَزَارَهُمَا رَجُلَانِ مِنْ تَمُودَ وَهُمَا قُدَارُ بْنُ
سَالِفٍ وَمُضَدَعُ بْنُ مَعْرَجٍ
وَالْمَرَاتَانِ عُنَيْزَةُ بِنْتُ غَنَمٍ وَصَدُوفُ بِنْتُ
الْمُحَيَّا

彼らの中に美貌を持った2人の女がいた。

サムードの2人の男が彼女らを訪れた。彼らはクダール・ブン・

サーリフとムドゥダウ・ブン・マアラジュであった。

2人の女はウナイザ・ビント・ガナムとサドーフ・ビント・

ムハイヤーであった。

فَقَالَتْ صَدُوفُ لَوْ كَانَ لَنَا فِي هَذَا الْيَوْمِ
مَاءٌ لَأَسْقِيْنَاكُمَْا خَمْرًا
وَهَذَا يَوْمُ النَّاقَةِ وَوَرِدَهَا إِلَى الْمَاءِ
وَلَا سَبِيلَ لَنَا إِلَى الشَّرْبِ

サドーフは言った。今日、私達に水があったら、

あなたがた2人にブドウ酒を飲ませてあげるのに。

今日は雌ラクダの日、それが水場に下りていく日だから

私達には飲むすべがない。

فَقَالَتْ عُنَيْزَةُ بَلْ وَاللَّهِ لَوْ أَنَّ لَنَا رَجَالًا
لَكَفَوْنَا إِيَّاهَا وَهَلْ هِيَ إِلَّا بَعِيرًا مِنَ الْإِبِلِ
فَقَالَ قُدَارُ يَا صَدُوفُ إِنَّ كَفَيْتِكَ أَمْرَ
النَّاقَةِ فَمَا لِي عِنْدَكَ

ウナイザが言った。でも、神かけて、もし男の人がいたら私達に代わってそれを処理してくれるでしょう。それも1頭のラクダに過ぎないではありませんか。

クダールが言った。サドーフよ、もし私があなたに

代わって雌ラクダのことを処理したら、何をくれるか。

彼女は言った。私自身を。あなたとラクダの間に妨げるものがありますか。

قَالَتْ نَفْسِي وَهَلْ حَائِلٌ دُونَهَا عِنْدَكَ

وَأَجَابَتِ الْأُخْرَىٰ صَاحِبَهَا نَحْوَ ذَلِكَ

そしてもう1人も相手に同様のことを答えた。

فَقَالَا مِيلًا عَلَيْنَا بِالْخَمْرِ

2人の男は言った。我々にブドウ酒をつけ。

فَشْرَبَا حَتَّىٰ تَوَسَّطَا السُّكْرَ

そして2人は酔いがまわるまで飲んだ。

ثُمَّ خَرَجَا فَأَسْتَغْوِيَا سَبْعَةَ رَهْطٍ²

そして2人は出かけて7人の者をけしかけた。

وَهُمُ التَّسْعَةُ الَّذِينَ أَخْبَرَ اللَّهُ عَنْهُمْ فِي

彼らは神がその書の中で、「彼らは地において

كِتَابِهِ أَنَّهُمْ يُفْسِدُونَ فِي الْأَرْضِ وَلَا

害をなし、善を行わない（コーラン27章48節）」と

يُصْلِحُونَ

伝えた9人である。

فَقَصَدُوا طَرِيقَ النَّاقَةِ فِي حَالِ صُدُورِهَا

彼らは雌ラクダが（水場から）出てくる道を目指した。

فَضْرَبَ قُدَّارٌ عُرْقُوبَهَا بِالسَّيْفِ فَعَقَرَهَا

クダールはラクダのひかがみを刀で切って倒した。

فَاتَّبَعَ فِعْلَهُ مُضْدَعٌ فَرَمَى الْعُرْقُوبَ الْآخَرَ

ムドゥダウは彼の行為の後に従って、もう一方のひかがみを

بِسَهْمِهِ فَخَرَّتِ النَّاقَةُ لَوَجْهِهَا

矢で射た。雌ラクダはうつぶせに倒れた。

وَجَاءَ قُدَّارٌ لِبَيْتِهَا فَنَحَرَهَا وَلَاذَ السَّقْبِ

クダールがラクダを切りに来て、殺した。子ラクダは

بِصَخْرَةٍ فَلَحِقَهُ بَعْضُهُمْ فَقَتَلَهُ وَفَرَّقُوا لَحْمَ

岩に避難したが、彼らのうちのある者が追いつき、それを殺した。

النَّاقَةِ

彼らは雌ラクダの肉を分けた。

وَوَرَدَ صَالِحٌ فَنظَرَ إِلَى مَا فَعَلُوهُ فَوَعَدَهُمْ

サーリフが来て彼らのした
ことを見ると、刑罰が来る
ぞと

بِالْعَذَابِ وَكَانَ ذَلِكَ فِي يَوْمِ الْأَرْبَعَاءِ

脅した。それは水曜日のこ
とであった。

فَقَالُوا لَهُ مُسْتَهْزِئِينَ يَا صَالِحُ مَتَى يَكُونُ

彼らはあざ笑って彼に言っ
た。サーリフよ、お前が
我々を脅した、

مَا وَعَدْتَنَا بِهِ مِنَ الْعَذَابِ عَنْ رَبِّكَ

お前の主からの刑罰はい
つあるのか。

قَالَ تَصْبِحُ وُجُوهُكُمْ يَوْمَ مُونِسٍ³ وَهُوَ

サーリフは言った。ムウニ
スの日—それは木曜日の
こと—に

الْخَمِيسُ مُصْفَرَّةً وَيَوْمَ الْعَرُوبَةِ مُحْمَرَّةً

お前たちの顔は黄色くな
り、金曜日には赤くなり、

وَيَوْمَ شِيَارٍ مُسْوَدَّةً ثُمَّ يُصْبِحُكُمْ الْعَذَابُ

土曜日には黒くなり、そし
て日曜日にはお前たちに

يَوْمَ الْأَوَّلِ

刑罰が下るだろう。

(مُرُوجُ الذَّهَبِ وَمَعَادِينُ الْجَوْهَرِ لِلْمَسْعُودِيِّ)

(出典: マスウーディー著
『黄金の牧場と宝石の鉱
山』)

1 ثمود は2段変化だが、3段変化のこともある。

2 3~10人の少数の人を表す集合名詞。

3 以下、古い曜日名が使われている

5. ムタラツミスとタラファ

قَالَ الْمُتَلَمِّسُ فَقُلْتُ لِطَرْفَةِ إِيَّيْ لَأَخَافُ
عَلَيْكَ مِنْ نَظَرَتِهِ إِلَيْكَ هَذِهِ مَعَ مَا قُلْتَ
قَالَ كَلَّا

فَكَتَبَ لَنَا كِتَابًا إِلَى الْمُكْعَبِرِ
كُتِبَ وَلَمْ نَرَهُ وَخُتِمَ وَلَمْ نَرَهُ
لِي كِتَابٌ وَلَهُ كِتَابٌ

وَكَانَ الْمُكْعَبِرُ عَامِلَهُ عَلَى عُمَانَ
وَالْبَحْرَيْنِ

فَخَرَجْنَا حَتَّى إِذَا هَبَطْنَا بِذِي الرِّكَابِ مِنْ
النَّجْفِ إِذَا أَنَا بِشَيْخٍ عَلَى يَسَارِي يَتَبَرَّرُ
وَمَعَهُ كِسْرَةٌ يَأْكُلُهَا وَهُوَ يَقْصَعُ الْقَمْلَ
فَقُلْتُ تَاللَّهِ مَا رَأَيْتُ شَيْخًا أَحْمَقَ
وَأَضْعَفَ وَأَقْلَّ عَقْلًا ...

ムタラツミスいわく、私はタラファに言った。お前を見る彼(アムル・ブン・ヒンド王)のこの目つきから、私はお前のことが心配だ。またお前が詠んだ詩のこと

もある。彼(タラファ)は言った。そんなことはない。

王は私達のためにムカアビルに宛てて手紙を書いた。

それは私達に見せずに書かれ、私達に見せずに封をされた。

私に1通、タラファに1通。

ムカアビルはオマーンとバハライン(現在のバハレーンとは異なる)における

王の代官であった。

私達は出発した。ナジャフのズー・リカーブ(地名)に

下った。そのとき私は左のほうに、老人が野原に出て(=用を足し)

パンのかけらを持ってそれを食べながら、しらみをつぶしているのを見た。

私は言った。神かけて、お前より愚かで、情けない、

理性の乏しい老人を見たことがない。...

قَالَ أُدْخِلْ طَيِّبًا وَأُخْرِجْ خَبِيثًا وَأَقْتُلْ عَدُوًّا

وَأَحْمَقُ مِنِّي الَّذِي يَحْمِلُ حَتْفَهُ بِيَمِينِهِ

لَا يَدْرِي مَا فِيهِ

قَالَ فَنَبَّهَنِي وَكَأَنَّمَا كُنْتُ نَائِمًا فَإِذَا غُلَامٌ

مِنْ أَهْلِ الْحِيرَةِ فَقُلْتُ

يَا غُلَامُ تَقْرَأُ قَالَ نَعَمْ فَقُلْتُ أَقْرَأُهُ

فَإِذَا فِيهِ مِنْ عَمْرٍو بْنِ هِنْدٍ إِلَى الْمُكَعْبِرِ

إِذَا جَاءَكَ كِتَابِي هَذَا مَعَ الْمُتَلَمَّسِ

فَاقْطَعْ يَدَيْهِ وَرِجْلَيْهِ وَأَدْفِنْهُ حَيًّا

فَأَلْقَيْتُ الصَّحِيفَةَ فِي النَّهْرِ

فَذَلِكَ حَيْثُ أَقُولُ

وَأَلْقَيْتُهَا بِالنَّثِيِّ مِنْ جَنْبِ كَافِرِ

الْبَيْتَيْنِ

وَقُلْتُ يَا طَرْفَةُ مَعَكَ مِثْلُهَا

彼は言った。私は良いものを取り入れ、悪いものを出し、敵を殺しているのだ。私より愚かなのは、中に何かがあるのかわらないで運命(死)を

右手に携えている者だ。

ムタラツミスは言った。彼が私を起こした。私は眠っていたかのようなだった。ふと見ると、ヒーラの住人の男の子がいた。私は言った。

君、字が読めるか？彼は言った。はい。私は言った。それを読んでくれ。何とそこにはこう書いてあった。アムル・ブン・ヒンドより、ムカアビルへ

この手紙がムタラツミスと共に届いたら、

彼の両手両足を切断し、生き埋めにせよ。

私はその文書を川に投げ込んだ。

それに関して私はこう詠んでいる。

私はそれを投げ捨てた大河のほとりの曲がり角に

云々という2行の詩である。

私は言った。タラファよ、お前にも同様のものがある。

قَالَ كَلَّا مَا كَانَ لِيَفْعَلَ ذَلِكَ فِي عَقْرِي

彼は言った。そんなことはない、王は私の屋敷の母屋で(私のなわばりで)

دَارِي

そんなことをするような人ではない。

قَالَ فَأَتَى الْمُكْعَبِرَ فَقَطَعَ يَدَيْهِ وَرِجْلَيْهِ

ムタラツミスは言った。そしてタラファはムカアビルのところへ行った。ムカアビ

وَدَفَنَهُ حَيًّا

ルは彼の両手両足を切断し生き埋めにした。

(كِتَابُ الْأَغَانِي)

(出典:『詩歌の書』但しこの部分はイスバハーニーの手によるものではないらしく、版によっては入っていない)

6. ダーラト・ジュルジュルの日 (イムルウ・ル・カイスのムアツラカ詩に出てくる)

وَقَالَ عَبْدُ اللَّهِ إِنَّ الْفَرَزْدَقَ قَالَ

アブドゥッラーいわく、ファラズダクが次のように言った。

أَصَابَنَا مَطْرٌ بِالْبَصْرَةِ جَوْدٌ

バスラに大変豊かな雨が降った。

فَلَمَّا أَصْبَحْتُ غَدَوْتُ رَكِبْتُ بَعْلَةً

私は朝になるとラバに乗って行き、

وَخَرَجْتُ نَحْوَ الْمَرِيدِ

ミルバドのほうへ出かけた。

فَإِذَا بِأَثَارِ دَوَابٍّ قَدْ خَرَجْنَ إِلَى نَاحِيَةِ

見ると獣の足跡が沙漠のほうに向かって

الْبَرِّيَّةِ

出ていた。

فَظَنَنْتُ أَنَّهُمْ خَرَجُوا يَتَزَهَّوْنَ وَهُمْ خُلُقَاءُ¹

それで私は人々が遠乗り
に出かけ、当然弁当と

أَنْ تَكُونَ مَعَهُمْ سَفْرَةً وَشَرَابٌ

飲み物を持って行ったと思
った。

فَاتَّبَعْتُ آثَارَهُمْ حَتَّىٰ أَنْتَهَيْتُ إِلَىٰ بَغَالٍ

私は足跡をたどった。する
と、池のそばにとめられた

عَلَيْهَا رَحَائِلُ مَوْقُوفَةٍ عَلَىٰ غَدِيرٍ

鞍を置いたラバ達のところ
にたどり着いた。

فَأَسْرَعْتُ الْمَسِيرَ إِلَىٰ الْغَدِيرِ فَأَشْرَفْتُ

私は急いで池の方に進
み、見下ろした。

فَإِذَا فِيهِ نِسْوَةٌ مُسْتَنْقِعَاتٌ فِي الْمَاءِ فَقُلْتُ

すると女達が水につかっ
ていた。私は言った。

لَمْ أَرَ كَالْيَوْمِ قَطُّ وَلَا يَوْمِ دَارَةِ جُلْجُلٍ

私は今日のような日を決し
て見たことがないし、ダー
ラト・ジュルジュルのような
日も見たことがない。

قَالَ ثُمَّ أَنْصَرَفْتُ فَنَادَيْتَنِي

彼は言った。そして私は立
ち去った。すると彼女たち
が私を呼んだ。

يَا صَاحِبَ الْبَغْلَةِ أَرْجِعْ نَسْأَلُكَ عَنْ شَيْءٍ

ラバの主よ、お戻り下さ
い、尋ねたいことがあります。

فَأَنْصَرَفْتُ إِلَيْهِنَّ وَقَعَدْنَ فِي الْمَاءِ إِلَىٰ

私は彼女達のところへ行っ
た。彼女達はのどまで水に

حُلُوقِهِنَّ

入って座った。

ثُمَّ قُلْنَ نَسْأَلُكَ اللَّهُ إِلَّا حَدَّثْتَنَا حَدِيثَ يَوْمِ

そして彼女達は言った。神
かけてお願いします、ダー

دَارَةِ جُلْجُلٍ

ラト・ジュルジュルの日の
話をして下さいますか。

قَالَ فَأَخْبَرْتُهُنَّ كَمَا كَانَ

彼は言った。それで私が彼
女達に、あったことを話し
た。

قَالَ عَبْدُ اللَّهِ بْنُ رَأْلَانَ قُلْتُ يَا أَبَا فِرَاسٍ
وَكَيْفَ كَانَ حَدِيثُ يَوْمِ دَارَةِ جُلْجُلٍ
قَالَ حَدَّثَنِي جَدِّي وَأَنَا يَوْمَئِذٍ غُلَامٌ حَافِظٌ
لِمَا أَسْمَعُ

アブドッラー・ブン・ラアラーンいわく、私は言った。
アブー・フィラーズ(ファラズダクのこと)よ、ダーラト・ジュルジュルの日の話はどのようなものだったのか。
彼は言った。私の祖父が私に話してくれたのだが、そのとき
私は聞いたことを覚える子供だった。その話はこうである。

أَنَّ أَمْرًا الْقَيْسِ كَانَ عَاشِقًا لِابْنَةِ عَمِّهِ
يُقَالُ لَهَا عُنَيْزَةٌ وَأَنَّهُ طَلَبَهَا زَمَانًا فَلَمْ
يَصِلْ إِلَيْهَا

イムルウ・ル・カイスはウナイザと言われる従姉妹に
恋をしていて、長い間彼女を求めたが、
近づけなかった。

فَكَانَ مُحْتَالًا لِيَطْلُبَ الْغِرَّةَ مِنْ أَهْلِهِ فَلَمْ
يُمْكِنَهُ ذَلِكَ حَتَّى كَانَ يَوْمَ الْغَدِيرِ وَهُوَ
يَوْمُ دَارَةِ جُلْجُلٍ

彼は家族の油断をうかがう工夫をしていたが、それは
できなかった。池の日、すなわちダーラト・ジュルジュル

وَذَلِكَ أَنَّ الْهَيَّ أَرْتَحَلُوا فَتَقَدَّمَ الرَّجَالُ
وَخَلَفُوا النِّسَاءَ وَالْعَبِيدُ وَالْعُسَفَاءُ وَهُمْ
الْأَجْرَاءُ وَاحِدُهُمْ عَسِيفٌ وَالتَّقَلُّ

の日が来るまでは。(ダーラト・ジュルジュルは地名)

それはこういうことである。
部族の者が出発することになり、男達が先に行き、女達、奴隷達、雇人達—

عسفاء 単数形

と荷物は後に行った。

فَلَمَّا رَأَى ذَلِكَ أَمْرُ الْقَيْسِ تَخَلَّفَ بَعْدَ

イムルウ・ル・カイスはそれを見て、仲間から、矢の届く距離、離れて

قَوْمِهِ غَلَوَةً فَكَمَنَ فِي غِيَابَةٍ مِنَ الْأَرْضِ

後から行った。そして土地のくぼみで待ち伏せをした。

حَتَّى مَرَّ بِهِ النِّسَاءُ

やがて女達が通りかかった。

فَإِذَا فَتَيَاتٌ فِيهِنَّ عُنَيْزَةٌ

娘達が来て、その中にはウナイザもいた。

فَلَمَّا رَأَيْنَ الْأَغْدِيرَ قُلْنَ لَوْ نَزَلْنَا فِي هَذَا

彼女らは池を見ると言った。この池に下りて、

الْأَغْدِيرِ وَأَغْتَسَلْنَا لِيَذْهَبَ عَنَّا بَعْضُ

幾分でも疲れをとるように、体を洗ったら

الْكَلَالِ

どうでしょう。

قَالَتْ إِحْدَاهُنَّ فَاَفْعَلْنَ

1人が言った。そうしなさい(そうしましょう)。

فَعَدَلْنَ إِلَى الْأَغْدِيرِ فَنَزَلْنَ وَنَحَّيْنَ الْعَبِيدَ

そして彼女らは池のほうへ道をそれ、下りて、奴隷達

عَنْهُنَّ وَدَخَلْنَ الْأَغْدِيرَ

を遠ざけて、池に入った。

فَأَتَاهُنَّ أَمْرُؤُ الْقَيْسِ مَخَاتِلًا وَهُنَّ غَوَافِلُ

イムルウ・ル・カイスは彼女らが油断しているとき、こっそり近づき、

فَأَخَذَ ثِيَابَهُنَّ وَهُنَّ فِي الْأَغْدِيرِ ثُمَّ جَمَعَهَا

彼女らが池にいる間に彼女らの着物を取り、それらを集めて

وَقَعَدَ عَلَيْهَا

その上に座った。

وَقَالَ وَاللَّهِ لَا أُعْطِي جَارِيَةً مِنْكُنَّ ثَوْبَهَا

そして言った。神に誓って、あなたがたのどの娘にも着物を渡さない、

وَلَوْ ظَلَّتْ فِي الْأَغْدِيرِ إِلَى اللَّيْلِ

たとえ夜になるまでそのまま池にいたとしても、

حَتَّى تَخْرُجَ كَمَا هِيَ مُتَجَرِّدَةً فَتَكُونَ هِيَ
الَّتِي تَأْخُذُ ثَوْبَهَا

裸のまま出てきて、本人が
着物を

受け取るまでは。

فَأَبَيْنَ ذَلِكَ عَلَيْهِ حَتَّى أَرْتَفَعَ النَّهَارُ

彼女らはそれを拒んだが、
とうとう日が高くなり、

فَخَشِينَ أَنْ يُقَصِّرَنَّ دُونَ الْمَنْزِلِ الَّذِي
يُرِيدُنَّهُ

目的の宿泊所に達しない
ことを

怖れた。

فَخَرَجَتْ إِحْدَاهُنَّ فَوَضَعَ لَهَا ثَوْبَهَا نَاحِيَةً
فَمَشَتْ إِلَيْهِ فَأَخَذَتْهُ وَلَبِسَتْهُ

それで彼女らの1人が出
てきた。彼はかたわらに着
物を置いてやった。

彼女はそこへ歩いて行き、
それを取って、着た。

ثُمَّ تَتَابَعْنَ عَلَى ذَلِكَ حَتَّى بَقِيَ عُنَيْزَةٌ

それから彼女らは次々と
後へ続き、ウナイザが残っ
た。

فَنَاشَدَتْهُ اللَّهُ تَعَالَى أَنْ يَضَعَ لَهَا ثَوْبَهَا

彼女は、いと高き神に誓っ
て、着物を置いてくれるよ
う、彼に頼んだ。

فَقَالَ لَا وَاللَّهِ لَا تَمَسِّيْنَهُ دُونَ أَنْ تَخْرُجِي

しかし彼は言った、いや、
神に誓って、彼女らが出て
きたように

عُرْيَانَةً كَمَا خَرَجْنَ

裸で出てこなければ、それ
にさわれない。

فَخَرَجَتْ وَنَظَرَ إِلَيْهَا مُقْبِلَةً وَمُدْبِرَةً

それで彼女は出てきた。彼
は彼女の一進一退を見て
いた。

فَوَضَعَ لَهَا ثَوْبَهَا فَأَخَذَتْهُ فَلَبِسَتْهُ

そして着物を置いてやり、
彼女はそれを取って、着
た。

فَأَقْبَلَ النِّسْوَةَ عَلَيْهِ فَقُلْنَ لَهُ

女達は彼に近づき、言っ
た。

غَدْنَا فَقَدْ حَبَسْتَنَا وَجَوَّعْتَنَا

私達に食べさせて下さい、
あなたが私達を足止めし、
空腹にさせたのだから。
彼は言った。あなたがたの
ために、私のラクダを殺し
たら、それを食べるか。

فَقَالَ إِنَّ نَحْرَتُ لَكُنَّ نَاقَتِي تَأْكُلْنَ مِنْهَا

فَقُلْنَ نَعَمْ

彼女らは言った。ええ。

فَأَخْتَرَطَ سَيْفَهُ فَعَرَقَبَهَا ثُمَّ كَشَطَهَا

彼は刀を抜き、ラクダのひ
かがみを切って倒し、皮を
はいだ。

وَجَمَعَ الْخَدْمَ حَطْبًا كَثِيرًا فَأَجَّجَ نَارًا

召使達が多くなたきぎを集
め、大きな火を

عَظِيمَةً

燃やした。

فَجَعَلَ يَقْطَعُ لَهُنَّ مِنْ كَبِدِهَا وَسَنَامِهَا

彼はラクダの肝臓やコブや
おいしい部分を彼女らのた
めに切り取り、

وَأَطَايِبِهَا فَيَرْمِيهِ عَلَى الْجَمْرِ وَهُنَّ يَأْكُلْنَ

それを炭火の上に投げ、
彼女らはそれを食べ、

مِنْهُ وَيَشْرَبْنَ مِنْ فَضْلَةٍ كَانَتْ مَعَهُ فِي

彼の小さい皮袋に残って
いたブドウ酒を

زُكْرَةَ لَهُ

飲んだ。

فَيُغَنِّيهِنَّ وَيَنْبِذُ إِلَى الْعَبِيدِ مِنَ الْكَبَابِ

彼は彼女らに歌を歌い、奴
隷達にも焼き肉を投げた。

حَتَّى شَبِعْنَ وَشَبِعُوا وَطَرِينِ وَطَرِيُوا

やがて、彼女らも彼らも満
足して楽しんだ。

فَلَمَّا أَرْتَحَلُوا قَالَتْ إِحْدَاهُنَّ أَنَا أَحْمِلُ

彼らが出発するとき、彼女
らの1人が言った。私は

حَشِيَّتَهُ وَأَنْسَاعَهُ

彼のしとねとラクダの帯を
運びましょう。

وَقَالَتِ الْأُخْرَىٰ أَنَا أَحْمِلُ طُنْفُسَتَهُ

別の女性が言った。私は彼の敷物を運びましょう。

فَتَقَسَّمْنَ مَتَاعَ رَاحِلَتِهِ بَيْنَهُنَّ وَزَادَهُ

彼女らは彼のラクダの荷物と食料を分配して運んだ。

فَبَقِيَتْ عُنَيْزَةٌ لَمْ يَحْمِلْهَا * شَيْئًا

ウナイザは何も運ばずに残った。

فَقَالَ لَهَا أَمْرُؤُ الْقَيْسِ

イムルウ・ル・カイスは彼女に言った。

يَا بِنْتَ الْكِرَامِ لَيْسَ لَكَ بُدٌّ مِنْ أَنْ

貴族の娘よ、あなたはどうしても私を

تَحْمِلِينِي مَعَكَ

運ばねばならない。

فَإِنِّي لَا أَطِيقُ الْمَشْيَ وَلَمْ أَتَعَوَّدْهُ

なぜなら私は歩くことはできないし、慣れてもないから。

فَحَمَلَتْهُ عَلَىٰ بَعِيرِهَا فَكَانَ يَمِيلُ إِلَيْهَا

そこで彼女は彼を自分のラクダに乗せた。彼は彼女の

وَيُدْخِلُ رَأْسَهُ فِي خَدْرِهَا وَيُقَبِّلُهَا

のほうへ傾き、カーテンの中に頭を入れて彼女にキスした。

فَإِذَا مَالَ هُوَ دَجُّهَا قَالَتْ

彼女はラクダかごが傾いたとき、言った。

يَا أَمْرًا الْقَيْسِ قَدْ عَقَرْتَ بَعِيرِي

イムルウ・ル・カイスよ、あなたは私のラクダを殺したようなものだ。

(شَرَحُ الْقَصَائِدِ السَّبْعِ الطُّوَالِ الْجَاهِلِيَّةِ

(出典:アンバーリーによるジャーヒリーヤ時代の

لِلْأَنْبَارِيِّ)

7つの長詩の注釈)

* 原文のまま。تحملها の誤りかもしれません

1 خَلِيقٌ の複数形 ~ خَلِيقٌ أَنْ ~ 当然~する

7. イムルウ・ル・カイス 1

○1～5までは『詩歌の書』のイムルウ・ル・カイスの項から、彼の父フジュルの死にまつわる様々な話の部分です。実際には1～5までは続けて書かれていますが、ここでは伝承ごとに区切りました。

وَذَكَرَ الْهَيْثَمُ بْنُ عَدِيٍّ

ハイサム・ブン・アディーが言った。

أَنَّ حُجْرًا لَمَّا اسْتَجَارَ عُوَيْرَ بْنَ شِجْنَةَ

フジュル(イムルウ・ル・カイスの父)はウワイル・ブン・シジュナに自分の娘と

لِبِنْتِهِ وَقَطِينِهِ تَحَوَّلَ عَنْهُمْ

従者の保護を求めた後、彼らを残して出発した。

فَأَقَامَ فِي قَوْمِهِ مُدَّةً وَجَمَعَ لِبَنِي أَسَدٍ

彼は部族を率いてしばらくとどまり、アサド部族に

جَمْعًا عَظِيمًا مِنْ قَوْمِهِ

対して自分の部族から大軍を集めた。

وَأَقْبَلَ مُدَلًّا بِمَنْ مَعَهُ مِنَ الْجُنُودِ

そして彼と共にいた軍隊を率いて威風堂々と進んだ。

فَتَأَمَّرَتْ بَنُو أَسَدٍ بَيْنَهَا

アサド部族は自分達の間で相談し合った。

وَقَالُوا وَاللَّهِ لَئِنْ قَهَرَكُمُ¹ هَذَا لِيَحْكُمَنَّ

彼らは言った。神かけて、この男が我々を征服したら

عَلَيْكُمْ حُكْمَ الصَّبِيِّ

子供のように(気まぐれに)支配するだろう。

فَمَا خَيْرُ عَيْشٍ يَكُونُ بَعْدَ قَهْرٍ وَأَنْتُمْ

(彼の)征服の後で、良い生活とは一体どんなものだろう(ないであろう)。

بِحَمْدِ اللَّهِ أَشَدُّ الْعَرَبِ فَمُوتُوا كِرَامًا

神のおかげで我々は最も強いアラブ人なのに。だから、潔く死のう。

فَسَارُوا إِلَى حُجْرٍ وَقَدْ أَرْتَحَلَ نَحْوَهُمْ

そして彼らはフジュルに向かって進んだ。彼は既に彼らのほうへ出発していた。

فَلَقَوْهُ فَأَقْتَتَلُوا قِتَالًا شَدِيدًا

彼らは彼と会い、激しい戦いをした。

كَانَ صَاحِبُ أَمْرِهِمْ عَلْبَاءَ بْنَ الْحَارِثِ

彼らの事を中心人物はイルバー・ブン・ハーリスで、

فَحَمَلَ عَلَى حُجْرٍ فَطَعَنَهُ فَقَتَلَهُ

彼はフジュルを攻撃し、槍で突き、殺した。

وَأَنْهَزَمَتْ كِنْدَةُ وَفِيهِمْ يَوْمَئِذٍ أَمْرُ الْقَيْسِ

(フジュルの)キンダ部族は敗走した。その日彼らの中にイムルウ・ル・カイスもいたが、栗毛の馬に乗って逃げ、アサドの人々は彼を捕えられなかった。

فَهَرَبَ عَلَى فَرَسٍ لَهُ شَقْرَاءَ وَأَعْجَزَهُمْ

彼らは彼の家の人々の何人かを捕え、殺し、

وَأَسْرُوا مِنْ أَهْلِ بَيْتِهِ رَجَالًا وَقَتَلُوا

自分達の手を分捕り品で満たし、フジュルの腰元や

وَمَلَأُوا أَيْدِيَهُمْ مِنَ الْغَنَائِمِ وَأَخَذُوا جَوَارِي

妻達や彼の所持品を取り、自分達の間で

حُجْرٍ وَنِسَاءَهُ وَمَا كَانَ مَعَهُ مِنْ شَيْءٍ

それを分配した。

فَأَقْتَسَمُوهُ بَيْنَهُمْ

1 2人称複数形の代名詞が使われているが、自分達のことを言っている。

8. イムルウ・ル・カイス2

وَقَالَ يَعْقُوبُ بْنُ الْأَسْكَيتِ حَدَّثَنِي خَالِدٌ

ヤアクーブ・ブン・スイッキートが言うには、ハーリド・キラビーが

الْكِلَابِيُّ قَالَ كَانَ سَبَبَ¹ قَتْلِ حُجْرٍ أَنَّهُ

私に語って言った。フジュルが殺された理由は次のことであった。

كَانَ وَفَدَ إِلَى أَبِيهِ الْحَارِثِ بْنِ عَمْرِو
فِي مَرَضِهِ الَّذِي مَاتَ فِيهِ وَأَقَامَ عِنْدَهُ
حَتَّى هَلَكَ ثُمَّ أَقْبَلَ رَاجِعًا إِلَى بَنِي أَسَدٍ
وَقَدْ كَانَ أَغَارَ عَلَيْهِمْ فِي النِّسَاءِ وَأَسَاءِ
وَلَايَتِهِمْ

وَكَانَ يُقَدِّمُ بَعْضَ ثِقَلِهِ أَمَامَهُ وَيُهَيِّئُ نَزْلَهُ
ثُمَّ يَجِيءُ وَقَدْ هِيَ لَهُ مِنْ ذَلِكَ مَا يُعَجِّلُهُ
فَيَنْزِلُ وَيُقَدِّمُ مِثْلَ ذَلِكَ إِلَى مَا بَيْنَ يَدَيْهِ
مِنَ الْمَنَازِلِ فَيَضْرِبُ لَهُ فِي الْمَنْزِلَةِ
الْأُخْرَى

فَلَمَّا دَنَا مِنْ بِلَادِ بَنِي أَسَدٍ وَقَدْ بَلَغَهُمْ
مَوْتُ أَبِيهِ طَمَعُوا فِيهِ
فَلَمَّا أَظْلَمَهُمْ وَضُرِبَتْ قِبَابُهُ اجْتَمَعَتْ بَنُو
أَسَدٍ إِلَى نَوْفَلِ بْنِ رَبِيعَةَ بْنِ خَدَّانٍ

彼は、病床の自分の父ハ
ーリス・ブン・アムルのもと
に来ていた。

—その病気でハーリスは
死んだ—そして父が死ぬ
まで
そのもとに滞在していた。
それからアサド部族のほう
へ帰って行った。

フジュルは女達のことでは
彼らを襲撃していた。そして、

彼らをひどいやりかたで支
配していた。

彼はいつも荷物の一部を
彼の前に先発させて、宿
泊の

準備をし、急ぎのことが用
意されてから来て、

泊まった。前方の宿泊地にも
同じようなものを

先発させ、別の宿泊地に
テントを

立てていた。

フジュルがアサド部族の国
に近づいたとき、彼らには
彼の父の死の知らせが
伝わっていたので、彼らは
フジュルを打ち破りたいと
思った。

フジュルが彼らを影に入れ
(=近づき)、彼の丸テント
が立てられたとき、アサド
部族は、ナウファル・ブン・
ラビーア・ブン・ハッダーン
のもとに集まった。

فَقَالَ يَا بَنِي أَسَدٍ مَنْ يَتَلَقَى هَذَا الرَّجُلَ
مِنْكُمْ فَتَقْتَطِعْهُ فَإِنِّي قَدْ أَجْمَعْتُ عَلَى
الْفَتْكِ بِهِ

ナウファルは言った。アサドの人々よ、あなたがたのうちで誰が、この男を迎え撃つか？そうすれば我々は彼と縁が切れる。私は彼を殺す

決意をした。

فَقَالَ لَهُ الْقَوْمُ مَا لِيذَلِكَ أَحَدٌ غَيْرَكَ
فَخَرَجَ نَوْفَلٌ فِي خَيْلِهِ عَلَى وَجْهَيْنِ مِنْ
قَوْمِهِ حَتَّى أَغَارَ عَلَى النَّقْلِ

人々は彼に言った。それをするのはあなた以外に誰もいない。ナウファルは彼の部族の(父方母方)二つの面からの騎馬隊を率いて

出発し、(フジュルの)荷物を襲撃した。

فَقَتَلَ مَنْ وَجَدَ فِيهِ وَسَاقَ النَّقْلَ وَأَصَابَ
جَارِيَتَيْنِ قَيْنَتَيْنِ لِحَجْرٍ

そしてそこにいた者を殺し、荷物(を載せたラクダ)を追い立て、

フジュルの腰元である歌姫を2人手に入れた。

فَلَمَّا رَأَوْا مَا قَدْ حَدَثَ وَأَتَاهُمْ بِهِ عَرَفُوا أَنَّ
حُجْرًا يُقَاتِلُهُمْ وَأَنَّهُ لَا بُدَّ مِنَ الْقِتَالِ
فَحُشِدَ النَّاسُ لِذَلِكَ

彼ら(アサドの人々)は、起こったこととナウファルがもたらしたのを見たとき、フジュルが彼らと戦うこと、戦いは避けられないことを知った。

そこで人々がそのために集まった(集められた)。

وَبَلَغَ حُجْرًا أَمْرَهُمْ فَأَقْبَلَ نَحْوَهُمْ
فَلَمَّا غَشِيَهُمْ نَاهِضُوهُ الْقِتَالَ وَهُمْ بَيْنَ
أَبْرَقَيْنِ مِنَ الرَّمْلِ فِي بِلَادِهِمْ يُدْعِيَانِ

彼らのことがフジュルに伝わると、フジュルは彼らのほうへ向かった。

彼が彼らのところに来ると、彼らは彼に戦いを仕掛けてきた。そのとき彼らは彼らの国の、二つの砂地(アブラク)の間にいた。そこは今日、

الْيَوْمَ أُبْرِقِي حُجْرًا

アブラカー・フジュル(フジュルの2つのアブラク)と言われている。

فَلَمْ يَلْبَثُوا حُجْرًا أَنْ هَزَمُوا أَصْحَابَهُ

彼らはまもなくフジュルの仲間を追い散らし、

وَأَسْرُوهُ فَحَبَسُوهُ فَتَشَاوَرَ الْقَوْمُ فِي قَتْلِهِ

彼を捕え、監禁した。人々は彼を殺すことについて相談した。

فَقَالَ لَهُمْ كَاهِنٌ مِنْ كَهَنَتِهِمْ بَعْدَ أَنْ حَبَسُوهُ

彼についての意見を出すために彼らが彼を監禁した後、1人の占い師が

لِيرَوْا فِيهِ رَأْيَهُمْ

彼らに言った。

أَيُّ قَوْمٍ 2 لَا تَعْجَلُوا بِقَتْلِ الرَّجُلِ حَتَّى

人々よ、その男を殺すのを急ぐな、私があなたがたの

أَزْجَرَ 3 لَكُمْ

ために、鳥占いをしてやるから。

فَأَنْصَرَفَ عَنِ الْقَوْمِ لِيَنْظُرَ لَهُمْ فِي قَتْلِهِ

彼はフジュルを殺すことについて鳥を見るため人々のところから立ち去った。

فَلَمَّا رَأَى ذَلِكَ عِلْبَاءُ خَشِيَ أَنْ يَتَوَاكَلُوا

(彼らの中心人物)イルバーはそれを見て、人々がフジュルを殺すことに

فِي قَتْلِهِ

消極的になるのを怖れた。

فَدَعَا غُلَامًا مِنْ بَنِي كَاهِلٍ وَكَانَ ابْنُ

イルバーはカーヒル部族(アサド部族の支族)の若者を呼んだ。その若者は

أُخْتِهِ وَكَانَ حُجْرٌ قَتَلَ أَبَاهُ زَوْجَ أُخْتِ

イルバーの姉妹の息子で、その父親、すなわちイルバーの姉妹の夫を

عِلْبَاءَ

フジュルが殺していた。

فَقَالَ يَا بُنَيَّ أَعِنْدَكَ خَيْرٌ فَتَتَّأَرَّ بِأَبِيكَ

イルバーは言った。我が息子よ、お前には父の仇を討ち、一代の名誉を得る

وَتَتَالَ شَرَفَ الدَّهْرِ وَأَنَّ قَوْمَكَ لَنْ يَقْتُلُوكَ

ほどの心意気があるか。
お前の部族はお前を殺し
はしないだろう。

فَلَمْ يَزَلْ بِالْغُلَامِ حَتَّى حَرَبَهُ وَدَفَعَ إِلَيْهِ

そしてその若者につきま
と、そそのかし、

حَدِيدَةً وَقَدْ شَحَذَهَا

既に研いであつた刃物を
渡した。

وَقَالَ ادْخُلْ عَلَيْهِ مَعَ قَوْمِكَ ثُمَّ اطْعَمْنَاهُ

そして言った。お前の部族
の者にまぎれて彼のところ

فِي مَقْتَلِهِ

に入り、彼の急所を突き刺
せ。

فَعَمَدَ الْغُلَامُ إِلَى الْحَدِيدَةِ فَخَبَأَهَا

若者はその刃物に手を伸
ばし、それを隠した。

ثُمَّ دَخَلَ عَلَى حُجْرٍ فِي قُبَّتِهِ الَّتِي حُبِسَ

そしてフジュルが監禁され
ている丸テントに

فِيهَا

入った。

فَلَمَّا رَأَى الْغُلَامُ غَفْلَةً وَثَبَ عَلَيْهِ فَقَتَلَهُ

若者は隙を見て彼に飛び
かかり、殺した。

فَوَثَبَ الْقَوْمُ عَلَى الْغُلَامِ فَقَالَتْ بَنُو كَاهِلٍ

人々は若者に飛びかかっ
た。カーヒルの人々は言っ
た。

ثَارْنَا وَفِي أَيْدِينَا

我々が仇を討とうとして捕
えていたのに。

فَقَالَ الْغُلَامُ إِنَّمَا ثَارَتْ بِأَبِي فَخَلَّوْا عَنْهُ

若者は言った。私は父の
仇を取っただけだ。それで
人々は彼を放した。

وَأَقْبَلَ كَاهِنُهُمُ الْمُرْدَجِرُ فَقَالَ

鳥占いをした占い師が来
て言った。

أَيُّ قَوْمٍ قَتَلْتُمُوهُ مَلِكِ شَهْرٍ وَذُلِّ دَهْرٍ

人々よ、あなたがたは彼を
1か月の王として、そして
永遠の屈辱として殺した。

وَقَدْ كَانَ بَيْنَ فِي وَصِيَّتِهِ مَنْ قَتَلَهُ وَكَيْفَ
كَانَ خَبْرُهُ

フジールは遺言状の中に、
誰が彼を殺したか、事情は

どうであったかを既に明らか
かにしていた。

فَانْطَلَقَ الرَّجُلُ بِوَصِيَّتِهِ إِلَى نَافِعِ ابْنِهِ

その男は遺言状を持って
フジールの息子ナーフィウ
のところに行った。

فَأَخَذَ التُّرَابَ فَوَضَعَهُ عَلَى رَأْسِهِ

すると彼は土を取り頭の上
に乗せた(悲しみを表す)。

ثُمَّ اسْتَقْرَاهُمْ وَاحِدًا وَاحِدًا فَكُلُّهُمْ فَعَلَ ذَلِكَ

それで、男は息子達のところ
へ1人ずつ次々に行った
がみんなそのようにした。

حَتَّى أَتَى امْرَأَ الْقَيْسِ فَوَجَدَهُ مَعَ نَدِيمٍ لَهُ

ついにイムルウ・ル・カイス
のところに来た。すると彼

يَشْرَبُ الْخَمْرَ وَيُلَاعِبُهُ بِالنَّزْدِ

は飲み仲間と酒を飲み、
すごろくをしていた。

فَقَالَ لَهُ قَتِلَ حُجْرٌ فَلَمْ يَلْتَفِتْ إِلَى قَوْلِهِ

男は彼に行った。フジール
が殺されました。が、彼は
その言葉をかえりみななか
った。彼の飲み仲間はす

وَأَمْسَكَ نَدِيمُهُ فَقَالَ لَهُ امْرُؤُ الْقَيْسِ

ごろくをやめた。するとイム
ルウ・ル・カイスは言った。

أَضْرِبْ فَضْرَبَ حَتَّى إِذَا فَرَغَ قَالَ

打て(すごろくを続けよ)。
それで飲み仲間は打ち、
やがてすごろくが終わると

مَا كُنْتُ² لِأُفْسِدَ عَلَيْكَ دَسْتَكَ

彼は言った。
私はあなたのゲームを損
なうような者ではない。

ثُمَّ سَأَلَ الرَّسُولَ عَنْ أَمْرِ أَبِيهِ كُلِّهِ فَأَخْبَرَهُ

それから使者に父のことす
べてを尋ね、使者はそれを
告げた。

وَقَالَ الْخَمْرُ عَلَى وَالنِّسَاءُ حَرَامٌ حَتَّى

イムルウ・ル・カイスは言っ
た。酒はやめた、女にも近
づかない、アサド部族の者

أَقْتُلَ مِنْ بَنِي أَسَدٍ مِائَةً وَأَجْرَ نَوَاصِي

を100人殺し、100人の
前髪を切る(捕虜にする)

مَائَةٍ

までは。

وَفِي ذَلِكَ يَقُولُ

彼はそのことについて詩を詠んでいる。

أَرِقْتُ وَلَمْ يَأْرُقْ لِمَا بِي نَافِعُ

私に起こったことのため、ナーフィウはよく眠っているが、私は眠れない香油をつけた(=真新しい=新しく発生した)心配事が私の情熱をかき立てた

وَهَاجَ لِي الشُّوقَ الْهَمُومُ الرَّوَادِعُ

1 ある人の子供達を集合的に言うとき単数形を使う。

2 مَا كَانَ لِـ ~ するような者ではない(完了形でも現在の意味)

10. イムルウ・ル・カイス4

وَقَالَ ابْنُ الْكَلْبِيِّ حَدَّثَنِي أَبِي عَنْ ابْنِ

イブン・カルビーが言った。アサド部族のイブン・カーヒンから伝え聞いて、私の父が私に語った。フジュルはイムルウ・ル・カイスを追放し、彼と一緒にには

الكَاهِنِ الْأَسَدِيِّ أَنَّ حُجْرًا كَانَ أَطْرَدَ

住まないと誓っていた。彼が詩を詠むことを軽蔑した

أَمْرًا الْقَيْسِ وَالْيَ الْأَ يُقِيمَ مَعَهُ أَنْفَةً مِنْ

からである。

قَوْلِهِ الشَّعْرَ

وَكَانَتْ الْمُلُوكُ تَأْنَفُ مِنْ ذَلِكَ

王達はそのこと(詩を詠むこと)を軽蔑していた。

فَكَانَ يَسِيرُ فِي أَحْيَاءِ الْعَرَبِ وَمَعَهُ

彼はアラブの諸部族を連れて放浪していた。彼と共

أَخْلَاطٌ مِنْ شَذَاذِ الْعَرَبِ مِنْ طَيِّبٍ وَكَلْبٍ

にタイイ部族、カルブ部族、バクル・ブン・ワイル部族の

وَبَكْرِ بْنِ وَائِلٍ

アラブの流れ者達の寄せ集めがいた。

فَإِذَا صَادَفَ غَدِيرًا وَرَوْضَةً وَمَوْضِعَ

彼は池と牧草地と狩猟地を見つけると、

صَيْدٍ أَقَامَ فَذَبَحَ لِمَنْ مَعَهُ فِي كُلِّ يَوْمٍ

滞在し、一緒にいる者のために毎日家畜を殺し、

وَخَرَجَ إِلَى الصَّيْدِ فَتَصَيَّدَ ثُمَّ عَادَ فَأَكَلَ

狩に出て、獲物を捕らえ、そして戻り、食事をし、

وَأَكَلُوا مَعَهُ فَشَرِبَ الْخَمْرَ وَسَقَاهُمْ وَغَنَّتْهُ

彼らも彼と共に食べ、ブドウ酒を飲み、彼らにも飲ませ、歌姫たちが彼に歌い、

فِيَانَهُ وَلَا يَزَالُ كَذَلِكَ حَتَّى يَنْفَدَ مَاءُ ذَلِكَ

その池の水が尽きるまで、ずっとそのようにしていた。

الْغَدِيرِ ثُمَّ أَنْتَقَلَ عَنْهُ إِلَى غَيْرِهِ

そしてそこから別のところへ移って行った。

فَأَتَاهُ خَبْرُ أَبِيهِ وَمَقْتَلِهِ وَهُوَ بِدَمُونٍ مِنْ

彼がイエメンの地のダツムーンにいたとき、彼の父についてのこと、

أَرْضِ الْيَمَنِ

父が殺されたことの知らせが彼に届いた。

أَتَاهُ بِهِ رَجُلٌ مِنْ بَنِي عَجَلٍ يُقَالُ لَهُ

彼に知らせを伝えたのはイジュル部族の人で、ワツサーフの兄弟、

عَامِرٌ الْأَعْوَرُ أَخُو الْوَصَّافِ

片目のアーミルと言われる男だった。

فَلَمَّا أَخْبَرَهُ بِذَلِكَ قَالَ

男が彼にそれを知らせると、彼は次のように詩を詠んだ。

تَطَاوَلَ اللَّيْلُ عَلَيَّ دَمُونُ

ダツムーンよ、夜が私に対して長くなった

دَمُونُ إِنَّا مَعَشَرٌ يَمَانُونَ

ダツムーンよ、我々はイエメンの人々であり

وَإِنَّا لِأَهْلِنَا مُحِبُونَ

我々は家族を愛している

ثُمَّ قَالَ ضَيَّعَنِي صَغِيرًا وَحَمَلَنِي دَمَهُ

そして言った。私が若いとき、彼は私を手放し、大人になってから

كَبِيرًا

血の復讐を背負わせた。

لَا صَحْوَ الْيَوْمِ وَلَا سُكْرَ غَدًا

今日は醒めないが明日はもはや酔わない。

وَالْيَوْمَ خَمْرٌ وَغَدًا أَمْرٌ فَذَهَبَ مَثَلًا

今日は酒だが明日は決断だ。
これはことわざになった。

ثُمَّ قَالَ

そして彼は詩を詠んだ。

خَلِيلِي لَا فِي الْيَوْمِ مَصْحَى لِشَارِبِ

2人の友よ、今日は飲む者にとって酔いが醒めることはない

وَلَا فِي غَدٍ وَكَانَ مَا كَانَ 1 مَشْرَبٌ

明日は、何ごとが起ころうと、もはや飲むことはない

ثُمَّ شَرِبَ سَبْعًا 2 فَلَمَّا صَحِيَ آلَى بِأَلِيَّةِ

そして彼は7杯飲んだ。酔いが醒めたとき、彼は誓いを立てた。

أَلَّا يَأْكُلَ لَحْمًا وَلَا يَشْرَبَ خَمْرًا وَلَا يَدَّهِنَ

肉を食べない、酒を飲まない、香油をつけない、

وَلَا يُصِيبَ أَمْرًا وَلَا يَغْسِلَ رَأْسَهُ مِنْ

女を襲わない、頭の汚れを洗わない

جَنَابَةٍ حَتَّى يُدْرِكَ بِثَأْرِهِ

父の仇を討つまでは。

فَلَمَّا جَنَّهُ اللَّيْلُ رَأَى بَرْقًا فَقَالَ

夜が帳を下したとき、彼は稲妻を見て、詩を詠んだ。

أرقتُ لِبَرْقِ بَلَيْلِ أَهْلٍ³

雷鳴がとどろく夜に稲妻のため私は眠れない

يُضِيءُ سَنَاهُ بِأَعْلَى الْجَبَلِ

その輝きは山の頂を照らす

أَتَانِي حَدِيثٌ فَكَذَّبْتُهُ

私のもとへ知らせが来たが私はそれを嘘だと思った

بِأَمْرِ تَزَعَزَعُ⁴ مِنْهُ الْقُلَلُ

山の峰々も震えることを伝えるその知らせを

بِقَتْلِ بَنِي أَسَدٍ رَبَّهُمْ

アサド部族がその主を殺したという知らせである

أَلَا كُلُّ شَيْءٍ سِوَاهُ جَلَلٌ⁵

その他のすべてのことはささいなことではないか

فَأَيْنَ رَبِيعَةٌ عَنْ رَبِّهَا

ラビーア部族は主から離れてどこにいたのか

وَأَيْنَ تَمِيمٌ وَأَيْنَ الْخَوْلُ

タミーム部族は、家来たちは、どこにいたのか

أَلَا يَحْضُرُونَ لَدَى بَابِهِ

彼の扉のもとに居合わせなかったのか

كَمَا يَحْضُرُونَ إِذَا مَا أَكَلُ

彼が食事をするとき居合わせたように

¹ وَكَانَ مَا كَانَ 何事が起ころうと

² سَبْعَ مَرَّاتٍ 7回 または سَبْعَ أَكْوَاسٍ (كَأْسَاتٍ) 7杯 のこと

³ 本来は أَهْلٌ これは「新月になる」の意味もあるが、ここでは「雷鳴がとどろく」の意味

⁴ تَزَعَزَعُ の ت が一つ省略されている。

⁵ 「重大なこと」と「ささいなこと」の両方の意味がある。

وَرَوَى الْهَيْثَمُ عَنْ أَصْحَابِهِ أَنَّ أَمْرًا

الْقَيْسِ لَمَّا قُتِلَ أَبُوهُ كَانَ غُلَامًا قَدْ تَرَعَّرَعَ

وَكَانَ بَنِي حَنْظَلَةَ مُقِيمًا لِأَنَّ ظِنَّرَهُ كَانَتْ

أَمْرَاءَ مِنْهُمْ

فَلَمَّا بَلَغَهُ ذَلِكَ قَالَ

يَا لَهْفَ هِنْدٍ إِذِ خَطِئْنَا¹ كَاهِلًا

الْقَاتِلِينَ² الْمَلِكِ الْحَلَاجِلَا

الْأَبْيَاتُ

وَقَالَ الْهَيْثَمُ بْنُ عَدِيٍّ لَمَّا قُتِلَ حُجْرٌ

أَنْجَازَتْ هِنْدٌ وَقَطِينُهُ إِلَى عُوَيْرِ بْنِ

شَجِنَةَ فَقَالَ لَهُ قَوْمُهُ

كُلْ أَمْوَالَهُمْ فَإِنَّهُمْ مَأْكُولُونَ

فَأَبَى فَلَمَّا كَانَ اللَّيْلُ حَمَلَ هِنْدًا وَقَطِينَهَا

ハイサムが彼の師匠達から聞いて伝えたところによると、イムルウ・ル・カイス

は父親が殺されたとき、既に成長した若者であり、

ハンザラ部族のところに住んでいた。なぜなら彼の

乳母がその部族の女だったからである。

そのこと(父の死)が彼に伝わったとき、彼は詩を詠んだ。

哀れなヒンド(彼の姉妹の名)よ、彼らはカーヒル部族を打ち損じた

高貴な王を殺した者達を

云々という詩句である。

ハイサム・ブン・アディーは言った。フジュルが殺されたとき

ヒンドとフジュルの家来達はウワイル・ブン・シャジナ

のもとへ逃げた。

するとウワイルに部族の者が言った。彼らの財産を食べよ(巻き上げよ)。彼らは食べられるもの(いいカモ)だ。

彼は拒否した。夜になると彼はヒンドと彼女の家来たちを運んだ。

وَأَخَذَ بِخِطَامِ جَمَلِهَا وَأَنْشَامَ بِهِمْ فِي لَيْلَةٍ

彼女のラクダのはづなを取って、彼らと暗い真っ黒

طُخْيَاءَ مُدْلَهَمَةٍ

な夜の中にまぎれこんだ。

فَلَمَّا أَضَاءَ أَلْبَرْقُ أَبْدَى عَنْ سَاقِيهِ وَكَانَتْ

稲妻が光ったとき、彼の両足が見えた。それらは

حَمَشَتَيْنِ فَقَالَتْ هِنْدُ

きやしやであった。ヒンドは言った。

مَا رَأَيْتُ كَأَلَّيْلَةٍ سَاقِي وَافٍ

私は今夜のように忠実な人の両足を見たことはありません。

فَسَمِعَهَا فَقَالَ

彼はそれを聞いて言った。

يَا هِنْدُ هُمَا سَاقَا غَادِرٍ شَرٌّ

ヒンドよ、それらは悪い裏切り者の両足です。(悪い気持ちを持ったことがある)

فَرَمَى بِهَا النَّجَادَ حَتَّى أَطْلَعَهَا نَجْرَانَ

彼は彼女を高地へ導き、ナジュラーン(地名)まで登らせた。

فَقَالَ لَهَا إِنِّي لَسْتُ أُغْنِي عَنْكَ شَيْئًا وَرَاءَ

彼は彼女に言った。この場所より向こうでは私はあなたの何の役にも立たない。

هَذَا الْمَوْضِعِ وَهُوَ لِأَيِّ قَوْمِكَ وَقَدْ بُرِّئْتُ

この人達はあなたの部族だ。私はあなたの

خُفَارَتِي

警護から解放された。

فَمَدَحَهُ أَمْرُؤُ الْقَيْسِ بَعْدَ قَصَائِدَ

イムルウ・ル・カイスはいくつかの長詩で彼を称えている。

مِنْهَا قَوْلُهُ فِي قَصِيدَةٍ لَهُ

その中の、長詩の一つで次のように詠んでいる。

أَلَا إِنَّ قَوْمًا كُنْتُمْ أَمْسِ دُونَهُمْ

昨日、あなたがたは、ある部族の前にいた。

هُمْ مَنَعُوا جَارَاتِكُمْ آلَ غَدْرَانَ

彼らは女達を保護することを断った 裏切り者の一族だ

عُوَيْرٌ وَمَنْ مِثْلُ الْعُوَيْرِ وَرَهْطِهِ

ウワイルと、ウワイルや彼の家族と同様の者達は

أَبْرًا بِمِيثَاقٍ وَأَوْفَى بِجِيرَانٍ

契約を守り、保護すべき者達を守った

هُمْ بَلَّغُوا الْحَىَّ الْمَضِيَّعَ أَهْلَهُمْ

彼らは途方に暮れた部族をその一族のもとに導き

وَسَارُوا بِهِمْ بَيْنَ الْعِرَاقِ وَنَجْرَانَ

彼らを連れてイラクとナジュラーンの間を進んだ

وَقَوْلُهُ

またこういう詩もある。

أَلَا قَبَّحَ اللَّهُ الْبَرَاجِمَ كُلَّهَا

神がバラージム部族すべての者を醜くするように

وَجَدَّعَ يَرْبُوعًا وَعَفَّرَ دَارِمًا

ヤルブーウ部族を傷物にし、ダーリム部族をほこりまみれにするように

فَمَا فَعَلُوا فِعْلَ الْعُوَيْرِ وَرَهْطِهِ

彼らはウワイルと彼の家族がヒンドの扉のもとに立って

لَدَى بَابِ هِنْدٍ إِذْ تَجَرَّدَ قَائِمًا

一肌脱いだような行いをしなかったから

1 主語は **الْخَيْلُ** (馬の集合名詞=騎兵隊)などとする

2 この定冠詞は詩の下半句の最初なのでハムザを発音する

كَانَ قَيْسُ بْنُ ذَرِيحِ الْكِنَانِيُّ رَضِيعَ
الْحُسَيْنِ بْنِ عَلِيٍّ بْنِ أَبِي طَالِبٍ رَضِيَ
اللَّهُ عَنْهُمَا أَرْضَعَتْهُ أُمُّ قَيْسٍ

キナーナ部族のカイス・ブン・ザリーフは(預言者の婿の)アリー・ブン・アビー・ターリブの息子フサインー2人に神が満足し給うように一の乳兄弟であった。

カイスの母がフサインに乳を飲ませた。

وَكَانَ مَنْزِلُ قَوْمِهِ فِي ظَاهِرِ الْمَدِينَةِ

カイスの一族の家はメディナの郊外にあったが

وَكَانَ هُوَ وَأَبُوهُ مِنْ حَاضِرَةِ الْمَدِينَةِ

彼と彼の父はメディナの町中に住んでいた。

قَالُوا فَمَرَّ قَيْسٌ لِبَعْضِ حَاجَتِهِ بِخِيَامِ بَنِي

人々が言うには、カイスはある用事でカアブ・ブン・フザーア部族のテントのところを通りかかり、その一つのテントのところ立ち止まった。

كَعْبِ بْنِ خُزَاعَةَ فَوَقَفَ عَلَى خَيْمَةٍ مِنْهَا

その部落は(男達が)留守だった。そのテントはカアブ部族の女性、

وَالْحَىُّ خُلُوفٌ وَالْخَيْمَةُ خَيْمَةُ لُبْنَى بِنْتِ

ルブナー・ビント・フバーブのテントだった。

الْحُبَابِ الْكَعْبِيَّةِ

فَاسْتَسْقَى مَاءً فَسَقَتْهُ وَخَرَجَتْ إِلَيْهِ بِهِ

カイスは水を飲ませてくれと頼んだ。彼女は水を汲み、それを持って彼のところへ出てきた。

وَكَانَتْ أَمْرًا مَدِيدَةً الْقَامَةَ شَهْلَاءَ حُلُوةَ

彼女は背がすらりとして、藍色の目をした、容貌も

الْمَنْظَرِ وَالْكَلَامِ

言葉使いもかわいい女性だった。

فَلَمَّا رَأَاهَا وَقَعَتْ فِي نَفْسِهِ وَشَرِبَ الْمَاءَ

彼は彼女を見たとき彼女が心の中に落ちた(好きになった)。彼は水を飲んだ。

فَقَالَتْ لَهُ أَنْتَزِلْ فَتَتَبَرَّدَ عِنْدَنَا قَالَ نَعَمْ
فَنَزَلَ بِهِمْ وَجَاءَ أَبُوهَا فَنَحَرَ لَهُ وَأَكْرَمَهُ
فَأَنْصَرَفَ قَيْسٌ وَفِي قَلْبِهِ مِنْ لُبْنَى حَرْ
لَا يَطْفَأُ

彼女は言った。立ち寄って私達のところで涼んでいきますか。彼は言った。はい。彼は彼らのところに立ち寄った。彼女の父が来て彼をもてなすためにラクダを殺し、彼に敬意を表した。彼は立ち去ったが、心にはルブナーへの熱い思いが

消えないでいた。

فَجَعَلَ يَنْطِقُ بِالشَّعْرِ فِيهَا حَتَّى شَاعَ
وَرُويَ

彼は彼女についての詩を詠み始め、やがてそれが広がり、

人々によって伝えられた。

ثُمَّ أَتَاهَا يَوْمًا آخَرَ وَقَدِ اشْتَدَّ وَجْدُهُ بِهَا
فَسَلَّمَ فَظَهَرَتْ لَهُ وَرَدَّتْ سَلَامَهُ وَتَحَفَّتْ
بِهِ فَشَكَا إِلَيْهَا مَا يَجِدُ بِهَا وَمَا يَلْقَى مِنْ
حُبِّهَا وَشَكَتْ إِلَيْهِ مِثْلَ ذَلِكَ فَأَطَالَتْ
وَعَرَفَ كُلُّ وَاحِدٍ مِنْهُمَا مَا لَهُ عِنْدَ
صَاحِبِهِ

そして別の日、彼は彼女のところに来たが、彼女を慕う思いは既に強くなっていた。彼が挨拶すると彼女が現れ挨拶を返し、好意を示した。

彼は彼女に自分が恋い焦がれていること、彼女を心に思っていることを訴えた。

彼女も彼に同様のことを長々と訴えた。

2人とも相手がどのように思っているかを

知った。

فَأَنْصَرَفَ إِلَى أَبِيهِ وَأَعْلَمَهُ حَالَهُ وَسَأَلَهُ
أَنْ يُزَوِّجَهُ إِيَّاهَا

そこで彼は自分の父親のところへ行き、事情を知らせ、

彼女と結婚させてくれるよう頼んだ。

فَأَبَى عَلَيْهِ وَقَالَ يَا بُنَيَّ عَلَيْكَ بِإِحْدَى

父は拒んだ。そして言った。息子よ、お前の従姉妹の

بَنَاتٍ عَمَّكَ فَهِنَّ أَحَقُّ بِكَ

1人を選び、彼女らのほうがお前にふさわしい。

وَكَانَ ذَرِيحٌ كَثِيرَ الْمَالِ مُوسِرًا فَأَحَبَّ أَنْ

(父の)ザリーフは財産が多く、裕福で、息子が他の部族の女のところへ

لَا يَخْرُجَ ابْنُهُ إِلَى غَرِيبَةٍ

出て行かないことを望んだ。

فَأَنْصَرَفَ قَيْسٌ وَقَدْ سَاءَ مَا خَاطَبَهُ أَبُوهُ

カイスは立ち去ったが、父親が言ったことで悲しんで

بِهِ

いた。

فَأَتَى أُمَّهُ فَشَكَاَ ذَلِكَ إِلَيْهَا وَأَسْتَعَانَ بِهَا

そして母親のところに来て彼女にそれを訴え、父親に

عَلَى أَبِيهِ فَلَمْ يَجِدْ عِنْدَهَا مَا يُحِبُّ

対して助けを求めたが、彼女のところでは望むことを見いだせなかった。

فَأَتَى الْحُسَيْنَ بْنَ عَلِيٍّ بْنِ أَبِي طَالِبٍ

そこで(乳兄弟の)フサイン・ブン・アリー・ブン・アビー・ターリブと、イブン・

وَأَبْنَ أَبِي عَتِيقٍ فَشَكَاَ إِلَيْهِمَا مَا بِهِ

アビー・アティークのところに来て、2人に、起こったことと

وَ مَا رَدَّ عَلَيْهِ أَبُوهُ

それに対する父親の返答を訴えた。

فَقَالَ لَهُ الْحُسَيْنُ أَنَا أَكْفِيكَ فَمَشَى مَعَهُ

フサインは彼に言った。私があなたに代わって世話をしよう。そして彼と一緒に

إِلَى أَبِي لُبَيْبٍ

ルブナーの父親のところへ足を運んだ。(フサインは預言者ムハンマドの孫)

فَلَمَّا بَصُرَ بِهِ أَعْظَمَهُ وَوَثَبَ إِلَيْهِ

ルブナーの父は彼を見ると敬意を表して彼のところへ飛んできて

وَقَالَ لَهُ يَا أَبْنِ رَسُولِ اللَّهِ مَا جَاءَ بِكَ
أَلَّا¹ بَعَثْتَ إِلَيَّ فَأَتَيْتُكَ

¹أَلَّاと同じだが意味が強い

قَالَ إِنَّ الَّذِي جِئْتُ فِيهِ يُوجِبُ قَصْدَكَ
وَقَدْ جِئْتُكَ خَاطِبًا أَبْنَتَكَ لُبْنَى لِقَيْسِ بْنِ

ذَرِيحٍ

فَقَالَ يَا أَبْنِ رَسُولِ اللَّهِ مَا كُنَّا لِنَعْصِيَ

لَكَ أَمْرًا وَمَا بِنَا عَنْ أَلْفَتِي رَغْبَةً

وَلَكِنَّ أَحَبَّ الْأَمْرِ إِلَيْنَا أَنْ يَخْطُبَهَا ذَرِيحٌ

أَبُوهُ عَلَيْنَا وَأَنْ يَكُونَ ذَلِكَ عَنْ أَمْرِهِ

فَإِنَّا نَخَافُ إِنْ لَمْ يَسْعَ أَبُوهُ فِي هَذَا أَنْ

يَكُونَ عَارًا وَسُبَّةً عَلَيْنَا

فَأَتَى الْحُسَيْنُ رَضِيَ اللَّهُ عَنْهُ ذَرِيحًا

وَقَوْمَهُ وَهُمْ مُجْتَمِعُونَ فَقَامُوا إِلَيْهِ إِعْظَامًا

لَهُ وَقَالُوا لَهُ مِثْلَ قَوْلِ الْخَزَاعِيِّينَ

言った。預言者の息子よ、
どうしてここへ来られたの
か。なぜ私のところへ
使いをよこされなかったの
ですか、そうすれば私のほ
うから出向きましたのに。
フサインは言った。私が来
た用件は、あなたを訪れる
ことが必要だったのだ。
私はカイス・ブン・ザリーフ
のために、あなたの娘の
ルブナーに求婚しに

来たのだ。

ルブナーの父は言った。預
言者の息子よ、我々は何
事も決してあなたに背くも

のではなく、その青年を嫌
うわけでもありません。

しかし、我々にとって最も
好ましいのは、彼の父親
のザリーフが
求婚すること、そのことが
彼のほうから行われること
です。

彼の父親がこのことに積
極的にならないなら、我々
にとって恥となり、

不名誉になることを我々は
怖れます。

そこでフサイン—神が彼に
満足し給うように—はザリ
ーフと彼の一族のところへ
行ったが、彼らは集まって
いて、彼に敬意を表してや
って来て、

(ルブナーの)フザーア部
族の人達と同様のことを言
った。

فَقَالَ لِذَرِيحٍ أَقْسَمْتُ عَلَيْكَ إِلَّا خَطَبْتَ
لُبْنَى لِأَبْنِكَ قَيْسٍ

フサインはザリーフに言った。あなたの息子のカイスのためにルブナーに求婚

するよう、誓ってあなたにお願いする。

قَالَ السَّمْعُ وَالطَّاعَةُ لِأَمْرِكَ

ザリーフは言った。承知しました。

فَخَرَجَ مَعَهُ فِي وُجُوهِهِ مِنْ قَوْمِهِ حَتَّى أَتَوْا

彼は一族の主だった者達を率いて出かけ、ルブナーのところに来た。

لُبْنَى فَخَطَبَهَا ذَرِيحٌ عَلَى أَبْنِهِ إِلَى أَبِيهَا

ザリーフは彼女の父親に、息子と彼女との結婚を申し込んだ。

فَزَوَّجَهُ إِيَّاهَا وَزُفَّتْ إِلَيْهِ بَعْدَ ذَلِكَ

そして彼を彼女と結婚させ、その後、彼女は行列で彼のもとに送られた。

فَأَقَامَتْ مَعَهُ مُدَّةً لَا يُنْكِرُ أَحَدٌ مِنْ

彼女は彼と共にしばらく暮らし、お互いがその相手に対し

صَاحِبِهِ شَيْئًا

何も気に入らないところはなかった。

وَكَانَ أَبْرَّ النَّاسِ بِأُمَّهِ فَأَلْهَتْهُ لُبْنَى

カイスは人々の中で最も母親孝行の人だったが、ルブナーのこと、

وَعُكُوفُهُ عَلَيْهَا عَنْ بَعْضِ ذَلِكَ

彼女につきまとっていることで、幾分そのことから気がそらされた。

فَوَجَدَتْ أُمَّهُ فِي نَفْسِهَا وَقَالَتْ

それで彼の母は心穏やかでなかった。彼女は言った。

لَقَدْ شَغَلَتْ هَذِهِ الْمَرْأَةُ أَبْنِيَّ عَنْ بَرِّي

この女が私への孝行から息子の気をそらせた。

وَلَمْ تَرَ لِلْكَلامِ فِي ذَلِكَ مَوْضِعًا حَتَّى

彼女がそのことを言い出す機会を見ないまま、カイスは

مَرِضَ مَرَضًا شَدِيدًا

重い病気になった。

فَلَمَّا بَرَأَ مِنْ عِلَّتِهِ قَالَتْ أُمُّهُ لِأَبِيهِ
 لَقَدْ خَشِيتُ أَنْ يَمُوتَ قَيْسٌ وَمَا يَتْرُكُ
 خَلْفًا وَقَدْ حُرِمَ الْوَلَدُ مِنْ هَذِهِ الْمَرْأَةِ
 وَأَنْتَ ذُو مَالٍ فَيَصِيرُ مَالُكَ إِلَى الْكَلَالَةِ
 فَزَوِّجْهُ بِغَيْرِهَا لَعَلَّ اللَّهَ أَنْ يَرْزُقَهُ وَلَدًا
 وَالْحَتِّ عَلَيْهِ فِي ذَلِكَ فَأْمَهَلَ قَيْسًا حَتَّى
 إِذَا اجْتَمَعَ قَوْمُهُ دَعَاهُ فَقَالَ
 يَا قَيْسُ إِنَّكَ أَعْتَلْتِ هَذِهِ الْعِلَّةَ فَخِفْتُ
 عَلَيْكَ وَلَا وِلْدَانَ لَكَ وَلَا لِي سِوَاكَ
 وَهَذِهِ الْمَرْأَةُ لَيْسَتْ بِوَلُودٍ فَتَزَوِّجْ إِحْدَى
 بَنَاتِ عَمِّكَ لَعَلَّ اللَّهَ أَنْ يَهَبَ لَكَ وَلَدًا
 تَقَرُّ بِهِ عَيْنُكَ وَأَعْيُنُنَا
 فَقَالَ قَيْسٌ لَسْتُ مُتَزَوِّجًا غَيْرَهَا أَبَدًا
 فَقَالَ لَهُ أَبُوهُ فَإِنَّ فِي مَالِي سَعَةً فَتَسَرَّ

彼が病気から回復すると、彼の母親は父親に言った。

私はカイスが跡継ぎを残さないまま死んでしまうことを怖れました。

この女は子供ができません。あなたは財産を持っているのに、

その財産は妻の親戚のものになるでしょう。

カイスを他の女と結婚させなさい。たぶん神様が子供をお授けくださるでしょう。母親は父親にそれをしつこく迫り、父親は時を延ばしていたが、

一族の人々が集まったとき、カイスを呼んで言った。

カイスよ、お前はこのような病気をわずらい、私はお前に子供がいないこと、

私にはお前以外にいないことを怖れた。

この女は子供が産めない。従姉妹の誰かと結婚せよ、

おそらく神はお前に子供を与えられ、その子によって、お前の目も

私達の目も涼しくなるだろう(楽しみとなる)。

カイスは言った。私は彼女以外とは決して結婚しません。

父は彼に言った。それなら、私の財産には余裕があるから、

بِالْإِمَاءِ

女奴隷を妾にせよ。

قَالَ وَلَا أَسُوءُهَا بِشَيْءٍ أَبَدًا وَاللَّهِ

カイスは言った。私は何事によっても彼女を決して悲しませることはしません。

قَالَ أَبُوهُ فَإِنِّي أُقْسِمُ عَلَيْكَ إِلَّا طَلَّقْتَهَا

父は言った。誓ってお前に頼む、彼女を離婚してくれ。

فَأَبَى فَقَالَ الْمَوْتُ وَاللَّهِ عَلَيَّ أَسْهَلُ مِنْ

カイスは拒否して言った。それよりは死のほうが私にはたやすいことです。

ذَلِكَ وَلَكِنِّي أَخَيْرُكَ خَصْلَةً مِنْ ثَلَاثِ

それより私はあなたが三つのうち一つを

خِصَالٍ

選ぶように勧めます。

قَالَ وَمَا هِيَ

父は言った。それは何か。

قَالَ تَتَزَوَّجُ أَنْتَ فَلَعَلَّ اللَّهَ أَنْ يَرْزُقَكَ وَلَدًا

カイスは言った。あなた自身が結婚するのです。おそらく神は私のほかに

غَيْرِي

子供を授けられるでしょう。

قَالَ فَمَا فِيَّ فَضْلَةٌ لِذَلِكَ

父は言った。私にはその余力はない。

قَالَ فَدَعْنِي أَرْتَحِلُ عَنْكَ بِأَهْلِي وَأَصْنَعُ

カイスは言った。

では、私に家族(妻)を連れて、あなたを離れて旅立たせて下さい。

مَا كُنْتُ صَانِعًا لَوْ مِتُّ فِي عِلَّتِي هَذِهِ

そして、この病気で私が死んでいたなら、なさっていたことをして下さい。

قَالَ وَلَا هَذِهِ

父は言った。それもできない。

قَالَ فَادْعُ لِبْنِي عِنْدَكَ وَأَرْتَحِلُ عَنْكَ

カイスは言った。では私はルブナーをあなたのところにおいて、私があなただを離

فَلَعَلِّيَ أَسْأَلُهَا فَإِنِّي مَا أَحِبُّ بَعْدَ أَنْ

تَكُونَ نَفْسِي طَيِّبَةً أَنَّهُا فِي خِيَالِي

قَالَ لَا أَرْضَىٰ أَوْ تُطَلِّقَهَا²

وَحَلْفَ لَا يَكُنْهُ سَقْفُ بَيْتٍ أَبَدًا حَتَّىٰ

يُطَلِّقَ لِبُنْيِ

فَكَانَ يَخْرُجُ فَيَقِفُ فِي حَرِّ الشَّمْسِ

وَيَجِيءُ قَيْسٌ فَيَقِفُ إِلَىٰ جَانِبِهِ فَيُظِلُّهُ

بِرِدَائِهِ وَيَصْلِي هُوَ بِحَرِّ الشَّمْسِ

حَتَّىٰ يَفِيءُ * أَلْفِيءٌ فَيَنْصَرِفُ عَنْهُ وَيَدْخُلُ

إِلَىٰ لِبْنِي فَيُعَانِقُهَا فَتُعَانِقُهُ وَيَبْكِي وَتَبْكِي

مَعَهُ وَتَقُولُ لَهُ

يَا قَيْسُ لَا تُطِيعَ أَبَاكَ فَتَهْلِكَ وَتُهْلِكُنِي

فَيَقُولُ مَا كُنْتُ لِأُطِيعَ أَحَدًا فِيكَ أَبَدًا

فَيُقَالُ إِنَّهُ مَكَثَ كَذَلِكَ سَنَةً وَقِيلَ إِنَّهُ أَقَامَ

れて旅立ちます。おそらく私は彼女のことを忘れるでしょう。心が良くなった（気持ち晴れた）後、彼女が夢の中に現れることを私は欲しません。父は言った。お前が彼女を離婚するまで私は満足しない。

そして父は、カイスがルブナーを離婚するまで決して

テントの屋根の下には入らないと誓った。

父は外に出て太陽の熱の中に立ち、カイスが来て、

その横に立って、自分の外套で父をその影に入れ、

彼自身は太陽の熱にさらされていて、

やがて影が返ってくる（日が落ちると、それからカイスは父のところを離れルブナーのところに入って、彼女を抱きしめ、彼女も彼を抱きしめ、彼は泣き、

彼女も彼と共に泣き、彼に言うのだった。

カイス、父上の言うことを聞かないで。さもないとあなたは死に、私を死なせます。そして彼は言うのだった。私はお前のことでは決して誰の言うことも聞かない。

このようにして1年続いたと言われ、また40日

عَلَىٰ ذَٰلِكَ أَرْبَعِينَ يَوْمًا ثُمَّ طَلَّقَهَا

そのようにして、その後、離婚したとも言われる。

وَهَذَا لَيْسَ بِصَحِيحٍ

これは正確ではない。

وَقَالَ بَعْضُهُمْ إِنَّهُ سَمِعَ قَيْسَ بْنَ ذَرِيحٍ

ある者が言うには、彼はカイス・ブン・ザリーフが

يَقُولُ لَزَيْدِ بْنِ سُلَيْمَانَ هَجَرَنِي أَبَوَايَ فِي

ザイド・ブン・スライマーンに次のように言うのを聞いた。

لِبُنَى عَشْرَ سِنِينَ أَسْتَأْذِنُ عَلَيْهِمَا

両親はルブナーのことで私を10年間勘当し、その間私は2人に

فَيَرُدَّانِي³ حَتَّى طَلَّقْتُهَا

出入りの許可を願ったが、2人は私を拒否し、とうとう私は彼女を離婚した。

قَالُوا فَلَمَّا بَانَتْ لِبُنَى بِطَلَاقِهِ إِيَّاهَا وَفَرَغَ

人々が言うには、離婚でルブナーが去るとき、彼は（離婚の）言葉を

مِنَ الْكَلَامِ لَمْ يَلْبَثْ حَتَّى اسْتُطِيرَ عَقْلُهُ

言い終わったとき、たちまち理性が飛ばされ、

وَذَهَبَ بِهِ وَلِحِقَهُ مِثْلُ الْجُنُونِ

失神し、狂気のようなものが彼にとりついた。

وَتَذَكَّرَ لِبُنَى وَحَالَهَا مَعَهُ فَأَسِيفَ وَجَعَلَ

彼はルブナーのこと、彼と共にいた彼女の様子を思い出して後悔し、

يَبْكِي وَيَنْشِجُ أَحْرَّ نَشِيجٍ

泣き出し、激しくすすり泣いた。

وَبَلَغَهَا الْخَبْرَ فَأَرْسَلَتْ إِلَىٰ أَبِيهَا لِيَحْتَمِلَهَا

その知らせが伝わると、彼女は自分を連れ去るよう父親に使いを送った。

وَقِيلَ بَلْ أَقَامَتْ حَتَّىٰ أَنْقَضَتْ عِدَّتَهَا

また、彼女は再婚が禁じられた期間が終わるまで留まり、

وَقَيْسٌ يَدْخُلُ عَلَيْهَا

カイスは彼女のところに入りしていたとも言われている。

فَأَقْبَلَ أَبُوهَا بِهَوْدَجٍ عَلَى نَاقَةٍ وَبَابِلٍ
تَحْمِلُ أَثَاثَهَا

彼女の父親が雌ラクダに
乗せたラクダかごと彼女の

家財を運ぶラクダの群れ
を連れてやって来た。

カイスはそれを見たとき彼
女の侍女に近づいて

言った。忌々しい女め、お
前達がいながら、どうして
私はこんな目に会うのか。
すると侍女は言った。私に
尋ねないで、ルブナーに尋
ねてください。

すると彼は行って、ルブナ
ーのテントに押し入って彼
女に尋ねようとした。

彼女の一族が彼を制した。
彼の一族の女が彼に近づ
いて

言った。どうしたのです。
忌々しいことに、あなたは
まるで無知な者か、

無知を装っている者である
かのように、尋ねている。

このルブナーは今夜か明
日、出て行くのです。

すると彼は失神し、理性を
失って、倒れた。

(出典:『詩歌の書』但し、
伝承経路の省略など一部
編集されている)

فَلَمَّا رَأَى ذَلِكَ قَيْسٌ أَقْبَلَ عَلَى جَارِيَتِهَا
فَقَالَ وَيْحَكَ مَا دَهَانِي فِيكُمْ
فَقَالَتْ لَا تَسْأَلْنِي وَسَلْ لِبْنِي
فَذَهَبَ لِيَلِمَ بِخِبَائِهَا فَيَسْأَلُهَا
فَمَنَعَهُ قَوْمُهَا فَأَقْبَلَتْ عَلَيْهِ أَمْرَأَةٌ مِنْ قَوْمِهِ
فَقَالَتْ لَهُ مَا لَكَ وَيْحَكَ تَسْأَلُ كَأَنَّكَ
جَاهِلٌ أَوْ تَتَجَاهَلُ
هَذِهِ لِبْنِي تَرْتَحِلُ اللَّيْلَةَ أَوْ غَدًا
فَسَقَطَ مَغْشِيًّا عَلَيْهِ لَا يَعْقِلُ
(كِتَابُ الْأَغَانِي)

2 この **أَوْ** は **حَتَّى** などと置き換えられるもので、接続法が続く。 3 **فَيْرِدَّانِي** が正しい。

* W.Wright, *A Grammar of the Arabic Language* ii . 29 D 以下参照

* この後、2人はそれぞれ別の人と結婚した後、復縁したということです。